正史を彷徨う

Part V

森隆一

（神武天皇陵（畝傍山東北陵）Wiki「神武天皇」より）

Part V 序

倭の五王と天皇の比定について、10 章で考察したが、納得のいく結論には程遠い状況である。また、倭の五王は天皇に対応するのか(させることが出来るのか)という疑問を述べた。すなわち、天皇家と倭の五王とは別の王朝ではないかという考えである。日本書紀に倭の五王の記述が全く見つからないことから当然湧いてくる疑問である。また、対応が可能であっても、何故書かれていないのかという疑問は残る。一般論として言えることは、書かれてないということは、編纂者は書きたくなかったということである。本稿の立場からは、これを書けば、東遷が 5 世紀に行われたことになり、日本書紀の根幹が崩れるということではないかと考える。それにしても、編纂者の構成能力は素晴らしいものと思っている。

神武天皇紀を見ていて、難波湖や奈良湖の存在を知り、難波(大阪)や吉備(岡山)の古代の海岸線は、現在のものとはかなり異なるものであることがわかってきた。神武天皇紀ではヤマト　(邪馬台・倭・大和) いう国(名)は現れない。この過程で、Flood Maps というサイトを見つけた。現在の海面をメートル単位で上下させたときの海岸線の変化を見ることができるものである。興味ある幾つかのシミュ

レーション結果を示す。

ここで、現在描いている倭の東遷のイメージを、次図で示しておく。

元邪馬台 蓋馬高原(白頭山)		三神
		前百済もこの辺りか?
	桓靈間	倭国大乱
↓	147-189	
伽耶山の近く 後に加羅	没年	卑弥呼⊂天照大神
↓	247まで	
北九州: 伊都→奴→不弥	265以降	台与⊂神功皇后∪天照大神
↓	西晋265-316	壱与
中九州: 菊池川→大野川	東晋317-419	崇神天皇紀と神功皇后紀の間
↓	宋420-479	日本武尊・景行天皇
東征: 瀬戸内海沿岸	讃413-425	倭の五王・神武天皇紀
広島・岡山・四国東部	珍430-438	吉備王朝
↓	済443-451	
東征:(? 淡路島)	興460-462	(?淡路王朝)
↓	武478-502	
東征: 河内(堺・近つ飛鳥)		河内王朝 (百舌鳥・古市)
↓	梁505-557	明日香
東征: 大和(倭・大倭)		豊系の天皇
↓		
東征終了→日本へ	隋581-618	推古朝593-628
↓	唐618-907	
(律令)日本		文武・聖武697-749

図 V01 邪馬台国東遷のイメージ

11. 神武天皇紀　（神武東遷）

序

日本書紀で、東遷が書かれているのは神武天皇紀で、空企画「歴代天皇・皇居等一覧」によれば、BC660 年に終わったことになっている。ここに何が書かれているか何が書かれていないかを見ていくことが、本パートの目標である。

神武天皇紀に書かれている内容は倭の東遷のダイジェストではないかと考えている。これは神武東征と呼ばれている。ここでは、神武天皇紀に書かれている征服を神武東征と呼ぶことにする。神武天皇紀全体の話は、都の移動を伴うもので、神武東遷と呼ぶほうが妥当であるが、適当に使うことにする。実際には、殆ど差がないので、まずは、神武天皇紀を見ていくことにする。ここでは、9.4 節で考察した日本武尊に関連することは考慮しないことにする。

11.1　東征以前

前文は、神日本磐余彦天皇、諱が彦火火出見、彦波□武□□草葺不合尊の第四子、母が玉依姫と書かれた後、

年十五立爲太子 長而娶日向國吾田邑吾平津媛 爲妃 生手研耳命

15 歳で太子となる。その後、日向國吾田邑の吾平津媛を娶り、妃とした。妃は手研耳命を生んだ。

という短いものである(87 文字)。初代天皇の前文としてはいささか簡単すぎる気がする。

立爲太子 を、15 歳で太子となる、としたが、爲 が自動詞的に用いられるかは疑問であるが、中国語の問題はわからないので、内容から判断した。

また、神武天皇は東征終了後に橿原宮で即位したことになっている。太子は次期天皇となる皇子であるから、初代天皇が即位前に太子になるのはおかしい気がする。崩御前は彦火火出見尊と呼ぶべきであると思うが、諡で呼ぶことが一般的になっているように思われる。

神代下の最後に次が書かれている。

波瀲武鸕鷀草葺不合尊 以其姨玉依姫爲妃 生五瀨命 次稻飯命 次三毛入野命 次神日本磐余尊 凡生四男 久之波瀲武鸕鷀草葺不合尊崩於西洲之宮 因葬日向吾平山上陵

波瀲武鸕鷀草葺不合尊は、その後、姨玉依姫を妃とし、五瀨命・稻飯命・三毛入野命・神日本磐余尊 の四男をえた。西洲之宮で崩御し、日向吾平山上陵に葬られた。

また、一書第１では、

狹野尊 亦號神日本磐余尊 所稱狹野者 是年少時之號也 後撥平天下奄有八洲 故復加號曰神日本磐余尊

と幼名が狹野尊と書かれている。磐余尊もある。神日本磐余火火出見尊、磐余火火出見尊などもある。

日向国の吾田邑の吾平津媛を娶り妃とした時の都は何処か。吾田邑に日向国と言っていることから神武天皇の居た所は日向国以外の地とも考えられる。一方、父の波瀲武鸕鷀草葺不合尊は、西洲之宮で崩御し、日向吾平山上陵に葬られた、と書かれているから、西洲之宮とも考えられる。

記年記事は45歳で東征を宣言することが最初のものである。15歳で太子となってから30年であるが、この間、記事が全くないというのは普通には有り得ないことと思われる。

東征を行うまでの記事は何処にあるのか。また、東征の出発地は、本稿の立場からは、倭王の都の邪馬台国である。ここでは、上に記した西洲之宮と解釈せざるを得ない。

崩御が76年で127歳であるから、51歳で即位したことになる。また、東征は天皇として行ったのではない。

次の疑問を設定しておく。

疑問 V01 45歳以前の神武天皇は何処で何をしていたのか。

Wiki「皇室の系図一覧」では

天照大神→天忍穂耳尊→瓊瓊杵尊→火折尊→盧茲草葺不合尊→神武天皇

となっている。瓊瓊杵尊から三人は日向三代と言われている。ここの火折尊は海幸彦山幸彦での弟の山幸彦である。

Wiki「山幸彦と海幸彦」では

山の猟が得意な山幸彦(弟)と、海の漁が得意な海幸彦(兄)の話である。兄弟はある日猟具を交換し、山幸彦は魚釣りに出掛けたが、兄に借りた釣針を失くしてしまう。困り果てていた所、塩椎神に教えられ、小舟に乗り綿津見神宮に赴く。

海神(大綿津見神)に歓迎され、娘の豊玉姫と結婚し、綿津見神宮で楽しく暮らすうち既に 3 年もの月日が経っていた。山幸彦は地上へ帰らねばならず、豊玉姫に失くした釣針と、霊力のある玉である潮盈珠と乾珠を貰い、その玉を使って海幸彦をこらしめ、忠誠を誓わせたという。この海幸彦は隼人族の祖である。

その後、妻の豊玉姫は子供を産み、それが鵜草葺不合命であり、山幸彦は神武天皇の祖父にあたる。

と書かれている。

倭の基盤は、標語的に言えば、鉄と船と考える。倭の移住の要因の1つとして、鉄鉱石の枯渇を考えた。とすれば、製鉄(鉱業)集団も付随して移動したはずである。さらに、鉄を原料に武器・農具などを造る人々と、王家の一族と直属の軍隊が考えられる。彼らの居住地は、基本的には、山とその裾野の平地と考える。このグループは、鉱物資

源を求めて、南または東を征服することを目指すが、南は東遷前の時点では終わっている。

この他に、倭王の軍隊をはこぶ必要があり、実際に行われた。この為には相当数の船と船員が必要としたと思われる。彼らは、当然、海岸に居住していた。また、彼らを倭の海軍とよぶのには少し躊躇する。日本史に現れる水軍が近い用語ではないかと考え、これを用いることにする。このグループは、平時は、水運(海・川)に携わっていたと考える。具体的な資料はないが、利益の大きいのは、朝鮮半島との交易であろう。

山幸彦と海幸彦の話は、この 2 つのグループの対立を反映しているとも思われる。対立から、抗争に移るのと、並立になるのと 2 つの方向が考えられる。

11.2.　東征開始

及年四十五歳 謂諸兄及子等曰　　東征を宣言した。

　これが最初の記年記事である。皇太子となってから30年経つ。話した対象が、群臣などの臣下を指す言葉ではなく、諸兄及子等となっている。諸兄の現代の意味は、男性が、同性の友人たち・同輩あるいは近しい先輩などに対して、敬愛の気持ちをこめていう語(weblio辞書)である。ここでは神武天皇から見た呼称のはずで、皇太子からみた諸兄とは誰をさすのか疑問であるが、親しい人々としておく。話はかなり長く、内容は理解できていない。

　東征宣言後の初めての記事は

四十五歳十月 天皇親帥諸皇子舟師東征 至速吸之門

天皇は諸皇子と舟師を率いて東征を始めた。まず速吸之門に至った。

　諸皇子と舟師以外の諸兄は同行しなかったのか。舟師は単に操船をするだけなのか、水軍的なものか。後者と考える。

　日向または豊後を出発地とすれば、速吸之門は豊予海峡か。速吸之

門 は水門とは書かれていないが、舟師を率いて東征を開始したことから、水が抜け落ちたと考えるのが自然であろう。出発地が玄界灘沿岸ならば、関門海峡も考えられるが、この後、筑紫国崗水門に行くことから、これは成り立ち難い。

速吸之門の次は

行至筑紫國菟狹 （菟狹者地名也 此云宇佐） 時有菟狹國造祖號曰菟狹津彦 菟狹津媛・・・是時 勅以菟狹津媛 賜妻之於侍臣天種子命 天種子命 是中臣氏之遠祖也

筑紫國の菟狹に行き着いた 菟狹國造の祖で菟狹津彦・菟狹津媛が現れた。・・・ 天種子命は中臣氏の遠祖である。（・・・は菟狹津彦・菟狹津媛との話）

である。勅 が使われているが、これは天皇の命令である。この時点では皇太子であるから、相応しくない。筑紫国 菟狹とある菟狹は宇佐でよいだろう。ただし、宇佐は豊前で筑紫ではない。筑紫に菟狹があるのだろうか。あるいは、古くは宇佐辺りも筑紫であったのであろうか。ここで、筑紫国と書かれているということから、ここまでは、筑紫国ではなかったと考える。これまでいた所を、四面のうちから選

べば、豊国が妥当と考える。

次の筑紫国崗水門と安芸国の記事は、それぞれ、１行で済ましている。

十有一月　天皇至筑紫國崗水門　　筑紫国の崗水門に至った。

コトバンク「岡水門・崗水門 」では、**福岡県北部、遠賀川河口付近の古地名。神武、仲哀両天皇の寄港地**、と書かれている。

宇佐から安芸に向かうのに、遠賀川河口を経由したことになる。

速吸之門を豊予海峡とすれば、四国に渡って、島伝いに北上する、あるいは、国東半島から姫島・祝島を経て柳井へ向かうルートも考えられ、距離的には半分程度である。

十有二月　至安藝國　居于埃宮　　安芸国に至り、埃宮に滞在した。

埃宮も何処かわからない。芸予諸島の島かもしれない。大三島は古い神社があるが伊予である。広島県に属する島では生口島か因島か。可能性としては、宮島も考えられる。

宮とある所は、ある程度留まったということである。周辺地域を征

討するために留まったことが考えられる。ここまでは順調に進んできたようだ。戦闘の記事と思われるものも書かれていない。倭国の影響下にあったとも考えられる。

安芸国の次は

四十六歳春三月 徙入吉備國 起行宮以居之 是曰高嶋宮 積三年間脩舟楫 蓄兵会 將欲以一擧而平天下也

徒歩で吉備国に入った。行宮を造りここに住まった。これを高嶋宮という。3年間船を修繕し、兵を養った。将軍は一挙に天下を平定することを望んだ。

徙入 とあるから、安芸から吉備までは陸路をとったことになる。

水軍(舟師)はどうなったのか。別行動をとったのか、ここまでで増えた軍勢を運びきれなかったのかが考えられる。

高嶋宮を造り、ここに留まる。三年間経って、船が修復され、兵も養えて、将は一挙に天下を平定することを望んだ。

紀では乙卯年となっているが、出発時の年齢と記事から四十六歳の年である。

疑問 V02 安芸から吉備には陸路で4カ月かかっている。この間の戦

闘は書かれていないが、有ったのか無かったのか。四国はどうなっているのか。

補足的な疑問としては吉備氏が何故現れないかも思い浮かんでくる。「吉備王国史」

http://17.pro.tok2.com/~kmlife/it-town/minamishinogoze/rekisi/rekisisabu-a/kibikokusi/kibi-rekisi.htm

では、百間川河口にある高島という島がありここが高島宮に比定されていると書かれている。

三年間 脩舟楫 蓄兵 したが、**將欲以一擧而平天下 ということから**、一時的にはここが到達地と考えていたのかもしれない。このとき、倭王は誰なのか、何処にいたのか、また神武天皇との関係は。

ここまでの経路は

速吸之門(10 月)→筑紫国 菟狭→筑紫國崗水門(11 月)

→安藝國 埃宮(12 月) →吉備國 高嶋宮(3 月) 三年間

となる。

11.3.　近畿転戦

四十九歳二月 皇師遂東 舳艫相接 方到難波之碕　會有奔潮太急

因以名爲浪速國 亦曰浪花 今謂難波訛也

皇軍は船団を東に進め、難波之碕に到達した。・・・

東征宣言の年のみ年四十五歳と書かれ、以後即位までの年記は干支で書かれている。吉備国に入ったのは四十六歳の年で乙卯年と書かれている。乙卯年は干支では 52 番目である。戊午年は干支では 55 番目であり、この年は四十九歳となり、東征開始から 5 年目となる。乙卯年から戊午年までは 3 年である。三年間留まったということとも合っているので、四十九歳とした。

難波之碕は大阪の上町台地の先端であろう。大阪城辺りと思っておけば大差ないと考える。岡山(吉備)から直接難波之碕に行くのは少し変な気もする。播磨、淡路島、四国の東北部の何処かを経由したと考えるのが自然である。吉備の制圧が一番大事で、時間がかかったことと考える。感覚的には、主な戦闘は 3 年程で終わっても、吉備の制圧には 3 代 60 年ほどはかかったのではないかと思っている。

疑問　V03　九州と近畿の間で安芸と吉備だけ取り挙げられているのは何故か。吉備と難波之碕の間は、何もなかったのか。播磨と淡路島の制圧が無ければ、安全に航行または進軍出来ないと思われる。

河内での記事は次のものである。

四十九歳三月　遡流而上　徑至河内國草香邑青雲白肩之津

流れを遡り、河内國草香邑の青雲白肩之津に到着した。

河内の草香邑は現在の東大阪市日下町という説がある。「クサカ→語義」 https://gejirin.com/src/Ku/kusaka.html
草香邑は日下町とされている。日下町の南は石切で、その南には河内国一之宮の平岡神社がある。

四十九歳四月　皇師勒兵歩趣龍田　而其路狭嶮　人不得並行　乃還更欲東踰膽駒山而入中洲　時長髄彦聞之曰

皇軍は陸路兵を龍田に進めた。しかし、その道は狭く険しく、人が並んで行くことが出来なかった。戻って膽駒山を東にわけいり、中洲に入ったとき、長髄彦が・・・

龍田は生駒郡斑鳩町龍田のことであろう。大和川を船では遡れなかったため歩行した。龍田を抜くことが出来なかった。生駒山を中央突破しようとした。

四十九歳五月 軍至茅淳山城水門・・・進到于紀伊國竈山

軍は茅淳の山城水門に至った。・・・紀伊國竈山に兵を進めた。

（・・・は、敗戦の記事）紀伊国竈山については、Wiki では竈山はないが、「竈山神社」があり、

竈山神社(釜山神社)は、和歌山県和歌山市和田にある神社

と書かれている。

茅淳山城水門は特定できていない。山城からは、山背を連想し、淀川を遡り、枚方と高槻の間の山が迫った辺りではないかをまず思いつくが、これが水門といえるか疑問である。日本書紀では、水門は海で両岸が狭まった所を示しているようである。

コトバンク「茅渟の海」大辞林 第三版の解説では

和泉・淡路の両国の間の海の古名。現在の大阪湾一帯。

と書かれている。地図をみていると、加太と地ノ島の間は水門と考えられる。これならば、次の紀伊国に繋がるが、山城のイメージからは前者である。

龍田の攻略を失敗した後、あるいは並行して、河内の南部の制圧にかかったと思われる。ここで方向を転じて、紀ノ川流域に進軍したのか。熊野荒坂津の後、菟田に到達した。

四十九歳六月 軍至名草邑・・・遂達于菟田下縣

軍は名草邑に至った。・・・遂に菟田下縣に達した。

名草邑については、和歌山県に名草神社がある。名草山は和歌山市の南、海南市に近い所で、その西には紀三井寺がある。

ここまでの経路は

難波之碕(浪速國、四十九歳二月) →河内國草香邑青雲白肩之津(三月)→龍田(四月)→茅淳山城水門(五月)→名草邑(六月)

である。ここまでを図に示す。

図 V02 神武天皇紀にあらわれる地名

ここでは、(行)宮の記載がない。この後は、奈良盆地が対象となる。これ以降は到達地名ではなく、相手や戦場名になる。

→(兄猾及弟猾)菟田縣(四十九歳八月) →菟田高倉山之巓(九月)
→撃八十梟帥於國見丘破斬之(十月)→・・・
と月に 1 回戦いの記事が続き、翌年の己未年三月に東征の終了宣言が為され、さらに、翌年の辛酉年春正月に橿原宮で即位し、神武天皇七十六年に 127 歳で崩御した。

ここに現れる地名は、大和のほぼ南の周辺地域である。河内から奈良を攻めるに幾つかのルートで臨んだが失敗続きであったようだ。名草邑の後菟田下縣については書かれていることを理解できなかった。名草邑から吉野川を遡って吉野から背後の菟田に至った。ここから、有名な八咫烏や土蜘蛛の出てくる話が書かれている。

四十九歳八月　天皇使徵兄猾及弟猾者・・・是後天皇欲省吉野之地

天皇は兄猾と弟猾に使いを送りよんだ。・・・この後、天皇は吉野の地を欲した。

四十九歳九月　天皇陟彼菟田高倉山之巓

天皇は菟田高倉山の嶺に登った。

疑問 V04 神武天皇記で、奈良盆地の中央部が何故現れないか。また、明日香を攻めるのに、何故先に菟田を攻めるのか。

四十九歳十一月　皇師大擧將攻磯城彦

皇軍は大挙して磯城彦を攻めた。

四十九歳十二月　皇師遂擊長髓彦　　皇軍は長髓彦を遂に撃った。

五十歳二月　命諸將練士卒　是時層富縣波□丘岬有新城戸畔者　又和珥坂下有居勢祝者　臍見長柄丘岬有猪祝者　此三處土蜘蛛並恃其勇力不肯來庭　天皇乃分遣偏師皆誅之

諸將に命じて士卒の練成を行った。このとき、層富縣の波□丘岬・・・。また、和珥坂下に・・・。臍見長柄丘岬に・・・。

五十歳三月　下令曰　自我東征於茲六年矣　・・・

下令した：東征を始めてから６年・・・。

東征終了の宣言である。

五十一歳八月　天皇當立正妃　改廣求華胄　時有人奏之曰

天皇は正妃を立てようとした。・・・

五十一歳九月　納媛蹈□五十鈴媛命　以爲正妃

五十鈴媛命を正妃とした。

五十二歳正月（神武元年）天皇即帝位於橿原宮

天皇は橿原宮で即位した。

二年　・・・天皇定功行賞

五年から三十年まで記事は無い。

卅二年 立皇子神渟名川耳尊爲皇太子

皇子の神渟名川耳尊を皇太子とした。

三十三年から七十五年まで記事無し。

七十六年 天皇崩于橿原宮 時年一百廿七歳

橿原宮で崩じた。127 歳であった。

6 年で東征が出来たとは考えられない。神武天皇記は東征のダイジェストのような感じである。

次の疑問が生じる。

疑問 V05 東征は 6 年で終わった。本当だろうか。ひるがえれば、東征は何故行われたか。

名草邑から吉野川を遡って吉野から背後の菟田に至ルートは奈良を目指したものとは思えない。これを伸ばせば、国道 169 号線から

166 号線を通って松阪に到るルートとなる。

　このルートを進めつつ、奈良南部に拠点をもうけたのではないか。

11.4.　神武東征検討

この章で取り上げた、神武天皇紀の検討を、地名を主に検討を行なっていく。

東征開始前後

神武東征における東征の最終地は、結果としては、近畿地方であった。始めから近畿を目指していたかはわからない。東征宣言の文に何か書いてあるのかもしれないが、この文は理解できていない。

出陣は、諸皇子と舟師を率いて行った。Wiki「神武天皇」からは、皇子は、手研耳命・神八井耳命・神沼河耳命(綏靖天皇)であるが、媛蹈鞴五十鈴媛を正妃としたのは 51 歳で東征後のことであり、東征開始時の子は手研耳命しか知られていない。他の天皇の子やその子孫も皇子であるが、初代天皇にいるのか疑問である。

崇神天皇紀の次の記事は 9.2 節で扱った。

十年 以大彦命遣北陸 武渟川別遣東海 吉備津彦遣西道 丹波道主命遣丹波 因以詔之曰 若有不受教者 乃擧兵伐之 既而共授印綬爲將軍

十一年 四道將軍以平戎夷之状奏焉

十七年 始造船舶

上の記事を見ていると、これは何かの準備ではないかという気がする。さらに言えば、これは神武天皇紀で欠けている東征の準備の話ではないか。言い換えれば、東征が1人の王によって始められたとすれば、その準備段階が崇神天皇に、東征の開始部分が神武天皇の東征の話の前半に配置したといえるのではないか。

出発から吉備までの経路は、

速吸之門10月 → 筑紫国 菟狭 → 筑紫国崗水門11月

→ 安芸国 埃宮12月 → 三月徙入吉備国3月

である。ここで、最初の経由地速吸之門には国が書かれていない。次は筑紫国 菟狭となっている。この後現れる地名も、初出は国名が付されている。これから、速吸之門は出発地と同じ国と考える。

妃の吾平津媛は日向国吾田邑となっている。これらから、神武天皇は筑紫国・日向国以外に居住していた推測する。9.3節でみた、古事記に書かれている筑紫島の四面のうちからは、豊国となる。

筑紫

Wiki「筑紫国」では、筑紫国は、のちの令制国での筑前国と筑後国にあたる、と書かれている。さらに、古事記・国産み神話においては、隠岐の次、壱岐の前に筑紫島(九州)を生んだとされ、さらにその四面のひとつとして、別名を白日別といったとされとも書き、次の古事記の記事を引用している。

次生 筑紫島 此島亦 身一而 有面四 面毎有名 故 筑紫国謂 白日別 豊国 言 豊日別 肥国 言 建日向日豊久士比泥別 熊曾国 言 建日別

この記事から、九州は筑紫島といい、そこに筑紫国・豊国・肥国・熊曾国があったことになる。

この記事は9.4節でも扱ったが、このとき、日向国がないことは気づいていなかった。熊曾国が日向国に替わったとすれば、その時期は日本武尊・景行天皇による熊襲平定の後となる。これは、本稿を見直す必要があるが、大筋は変わらないと思えるので、今後の課題としておく。

九州の北岸が筑紫國、大野川と菊池川流域が豊国、その南に肥国・

熊曾国という可能性が考えられる。豊国と肥国は東西かもしれない。

古くは、九州で倭の支配している地域が筑紫かもしれない。その次が豊の国を支配下に置いた。この後は、豊国を拠点として、肥国・熊曾国を攻略した後、東征に着手したのではないかと考える。

これより、東征の出発地は豊国と考える。

宇佐に至る前の速吸之門としては、関門海峡か豊予海峡を挙げた。豊国を出発地とすれば、後者になる。

Wiki「豊予海峡」では

豊予海峡は、大分県大分市(旧佐賀関町)の関崎と愛媛県伊方町(旧三崎町)の佐田岬によって挟まれる海峡。速吸瀬戸とも呼ばれる。

と書かれていることから、速吸之門 は 速吸之水門 で豊予海峡としておく。

Wiki「宇佐神宮」では

社伝等によれば、欽明天皇32年(571年?)、宇佐郡厩峯と菱形池の間に鍛冶翁降り立ち、大神比義が祈ると三才童児となり、「我は、譽

田天皇廣幡八幡麻呂(註:応神天皇のこと)、護国霊験の大菩薩」と託宣があったとある。宇佐神宮をはじめとする八幡宮の大部分が応神天皇(誉田天皇)を祭神とするのはそのためと考えられる。

安芸

宇佐の後、崗水門を経て安芸に向かう。

九州を出て最初に書かれているのが安芸である。豊後から船で出発したとすれば不自然ではないが、周防と伊予のほうが安芸より先に対象となるのがより自然である。取り挙げられていないのは、既に勢力下においていたのかもしれない。

安芸に関しては 至安藝國 居于埃宮 と書かれているので、暫く滞在したと思われる。

吉備

まず、崇神天皇紀の戦闘を伴う記事は、武渟川別と吉備津彦が共に出雲振根を誅殺している記事と吉備国平定の記事であった。

日本書紀の 高嶋宮 の所在地が、児島湾にある高島とされている。神武天皇の滞在地、すなわち邪馬台国、としては小さい。児島か吉備津辺りが妥当と考える。

神武天皇の東征は 6 年かかったことになっている。その半分ほどの 3 年の間吉備に滞在した。東征軍はここで東征を(一旦)終了し、吉備地方を統治することに方針を定めたのではないか。東征軍は、出発時には、水軍主体の軍隊であったと考える。安芸からの重要な目標は、中国山地の鉱物資源で産地での戦いとなる。安芸の埃宮で吉備地方に侵攻するにたる戦力、特に陸戦部隊、の整備と、情報収集などが行われたのではないか。吉備でも同様に、高嶋宮に居住し、脩舟楫 蓄兵 をする共に、吉備地方の制圧が行われたと考える。

吉備で連想するものは吉備団子、すなわち、桃太郎伝説である。

新羅の脱解王のところで、脱解王の生誕伝説から桃太郎を連想す

ると述べた。脱解王は倭に近い所の出身である。二韓＋倭説からは、倭(の跡地)の出身と考える。関係があるとすれば、東征軍の中には脱解王故地の出身者の有力な武将がいたか、その前から、脱解王故地の出身者が移住していたかが考えられる。

疑問 V06 桃太郎伝説と脱解王の生誕伝説との関係は。

難波之碕

Wiki「難波津」の概要では次のように書かれている。

難波津とは、古代大阪湾に存在した港湾施設の名称である。現在の大阪市中央区付近に位置していたと考えられている。瀬戸内海が現在のような形になったのは縄文時代のことであるが、当初の海岸線は生駒山の麓、現在の東大阪市まで入り込んでいた。この湾を河内湾と呼ぶ。その後、河内湾の入り口は堆積した土砂で埋まり数条の砂州となり(天満砂州)、2 世紀から 3 世紀にかけて、河内湾は完全に瀬戸内海から切り離されて草香江と呼ばれる湖となった(河内湖)。古墳時代に入ると、人々は水運の利便性を考えて瀬戸内海と河内湖の間

に運河を掘削し、これを難波堀江と名付けた。また難波堀江の途中の、砂州と砂州の間にできていた潟湖にも港湾施設が建設された。これが難波津である。

また難波津の東、上町台地の先端からは16棟もの倉庫群の遺構が発掘されている。なお、文献史料には難波館と呼ばれる商館の存在も示されているが、こちらの遺構はいまだ発見されていない。

大化の改新の後には、難波津の南東に難波長柄豊碕宮(前期難波宮)が造営され、都が移された。しかし654年に孝徳天皇が崩御すると都は明日香に戻り、686 年には難波長柄豊碕宮は焼失してしまう。奈良時代にはいわゆる後期難波宮が再建され、一時期聖武天皇が都を置いた。

ところが、8世紀に入ると、難波津は土砂の堆積によって港湾施設としての機能を失っていくことになる。762年に安芸国から廻送された遣唐使船が難波津で動けなくなる事件が発生する(続日本紀天平宝字6年4月丙寅条)など、大型船の停泊が困難になっていった。このため、淀川と三国川(現在の神崎川)を結び付ける工事が行われる事になり、その工事は785年に完成している(続日本紀延暦4年正月庚戌条)。

この解説は概ね同意できる。古墳時代に入ると、人々は水運の利便性を考えて、の部分は、このノートでは、東遷した倭国が、ということになる。現代でも、水利事業の主体は行政機関である。

日本書紀で難波津が現れるのは推古天皇十六年の裴世清を迎える記事である。このとき 造新館於難波高麗館之上 とされ、難波大郡で饗応の宴を行ったとある。ここで、難波津の東、上町台地の先端からは 16 棟もの倉庫群の遺構が発掘されている、と書かれていることが気にかかる。

河内湖

遡流而上 徑至河内國草香邑青雲白肩之津

を考えてみる。大阪城辺りから、東大阪市日下町に船で遡上したということである。上の引用文では「河内湖」の存在が書かれている。

古代地図を探しているうちに、「古代地図と軟弱地盤」url は

https://mbp-japan.com/osaka/oado/column/2721026/

を見つけた。これを引用する。

説明文では、**青い点線は縄文時代の海岸線です。赤い点線は古墳時**

代。今とは随分印象が異なります。上町台地から西側は海です。また上町台地の東側にも河内湖（河内潟）と云う入江が広がっていました。淀川や大和川からの土砂の堆積や、海水面の後退で現在の様な地形になっています。ということである。さらに、J-shis Map との比較もなされている。

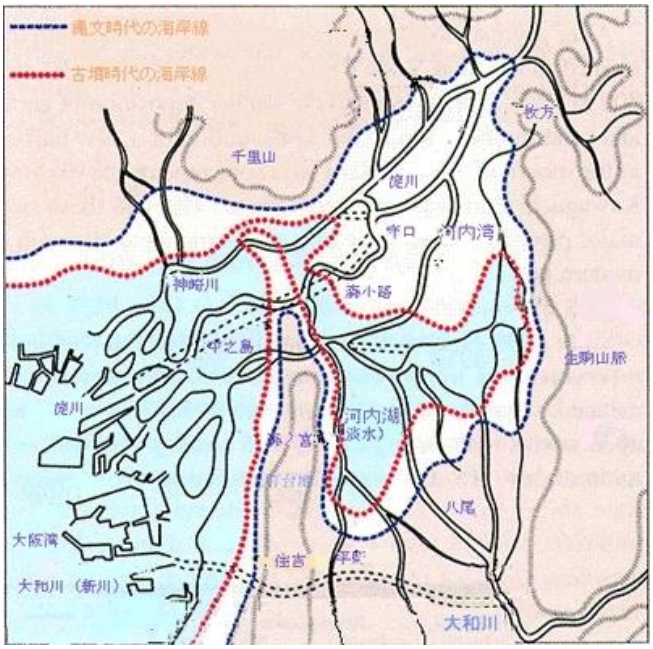

図 V03 河内湖

赤い点線の東の縦の部分は、凡そ国道 170 号線と考えている。この沿線で、大阪城の真東の地点に日下町があり、近くには枚岡神社がある。また、上にある青い点線の中央部分はほぼ国道 171 号線(西国街道)であろう。

大和川の付け替え

船での遡上が可能か調べているうちに、「大和川の付替え」が見つかった。

https://www.kkr.mlit.go.jp/yamato/about/yamato300/tukekae/tukekae3.html

「大和川の付替え　付替えがもたらしたもの」の地図を引用する。

図 V04 大和川の付替え

また、柏原市のホーム・ページの「大和川の歴史」

http://www.city.kashiwara.osaka.jp/docs/2015072600070/

では川跡の発掘などの面白い記事が書かれている。付け替え後の堺港に関して、次が書かれている。

新河口に近い堺の町は、海に面しているので、新川が流れてくる前には高潮の被害はあったものの、川の氾濫による被害はそれほどありませんでした。ところが、新しい大和川が運んでくる土砂が河口部にたまったことで、堺港は浅くなってきました。いくら改修しても港がすぐに埋まり、船が入れなくなりました。港の位置を何度も変更せざるを得なくなり、6回におよぶ改築工事が行われたにもかかわらず、埋没を余儀なくされたのです。これによって、中世の自由な湾港都市として栄華を誇った堺の港は、衰退していきました。

古代においては、上町台地の東、生駒山脈の西、(現在の)大和川の北の部分は、湖か干潟であり、征服して拠点を造るような場所ではなかったということになる。

草香邑の後は、龍田・膽駒山と転戦したが、攻略できなかった。茅

淳の山城水門の後に紀伊國竈山に兵を進めた。

奈良への進出を諦め、紀伊国に回った。

話の筋からは、威力偵察を行っていたのではないかとも見られる。

奈良湖

「生駒の神話」

http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/2015/07/post-36cd.html

に次の図 V05 奈良湖 がある。オリジナルは「縄文時代の江戸」

http://www.ne.jp/asahi/woodsorrel/kodai/edo/index.html

と思われるが、見易さから「生駒の神話」を選んだ。「縄文時代の江戸」では江戸も扱われていて、縄文時代の江戸・1450 年以前の江戸・1590 年頃の江戸等の地図が載せられている。このサイトでは、江戸がメインである。

図 V05 の説明には、

青は弥生～古墳時代に湖であったと思われる部分です。水面標高は 45m あたりか。濃い青は飛鳥時代あたりでも湖であったと思われる部分です。黒い家マークは縄文集落、白は弥生集落、黄色の円マー

クは古墳類、逆Ｕマークは銅鐸出土地です。

と書かれている。

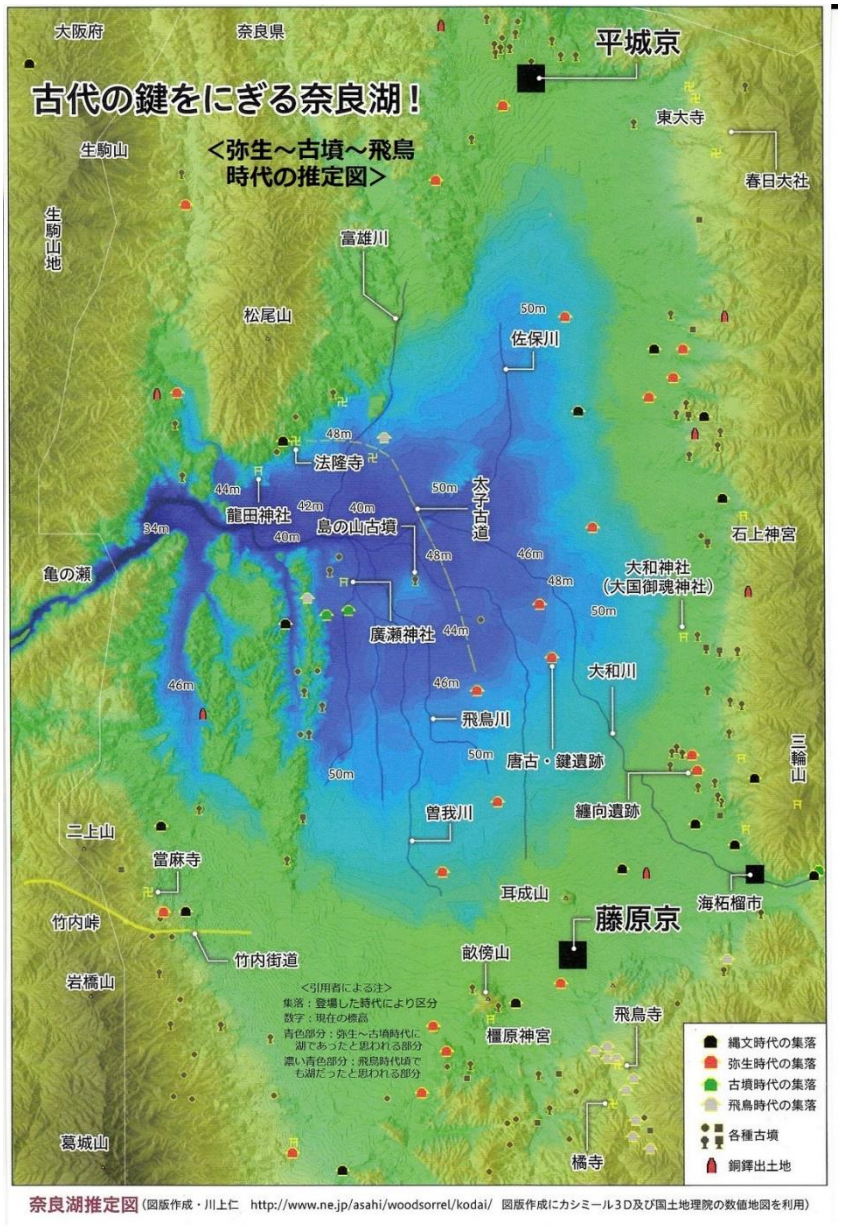

図 V05 奈良湖

奈良湖は内陸湖で古墳時代に湖であった青い部分の湖水面の標高

は 45mということである。奈良湖の縮小は縄文海進後の海退とは関係なく、河川による土砂の堆積・干拓・上流の開発による水量の減少などによるものと考える。

図 V05 を見て感じることを挙げていく。

まずは、縄文の集落遺跡はほとんどが緑の部分にある。青い部分には集落の遺跡のみである。縄文が 1 か所で弥生が 7 か所である。唐子遺跡はここに入る。これから、古墳時代は青い部分は湖か沼地であったといえ、この部分を除くと、奈良盆地の平野部は半減してしまう。

奈良市辺りに関しては、山野辺の道の高さ以下の地域では平城宮以外は何もない。

唐子遺跡に関して、Wiki「唐古・鍵遺跡」に、跡北部・西部・南部の小高い丘に居住域が形成される、と書かれている。これは小高い丘にしか居住できなかったとみるべきではないか。とすれば、卑弥呼の都というのは検討を要するのではないか。東遷した倭王朝の前線基地であったような気がする。

縄文・弥生・古墳がセットである地域は、当麻寺周辺、畝山の南と明日香、三輪山の麓、石上神宮と春日大社の中間である。法隆寺は上記 4 か所からはかなり離れている。

疑問V04の、神武天皇記で、奈良盆地の中央部が何故現れないか、に対しては、奈良盆地の中央部は古墳時代は湖沼であったことから、攻めるのが難しく、攻略の利点が殆どない、と言うことができる。

これは前から解っていたのか、龍田を攻めて解ったことか。その後方向を転じて、紀伊国を攻略したことからは、後者である可能性が高い。威力偵察が有効であったともいえる。

紀伊國竈山の後は、

遂越狭野而到熊神邑 且登天磐盾

狭野を越えて、熊神邑に到着した。そして天磐盾に登った。

さらに、海難にあった後、

天皇獨與皇子手研耳命 帥軍而進至熊野荒坂津(亦名丹敷浦)

天皇は皇子の手研耳命だけと共に郡を率い熊野荒坂津に到った

ここから、菟田下縣に到着した後、奈良盆地南部(明日香とその周辺)を攻略し、

天皇即帝位於橿原宮　　天皇は橿原宮で帝位についた

となり、神武東征は終わる。皇位ではなく帝位が使われている。天皇をミカドと呼ぶ例もあったと記憶している。日本書紀の編纂時と天皇制の成立が同じかそれ程離れていないという事を示すものかもし

れない。

狭野・熊神邑は何処かわからない。紀伊國竈山(和歌山市)からの攻略ルートとしては、紀ノ川(吉野川)を遡っていくのが自然と考える。現状では熊野を経由したとは考えにくい。1つには紀伊水道の先は外洋で当時の船で航行できたのかは疑問である。航路としては、淡路島の南辺から鳴門海峡を経て瀬戸内海へ抜ける航路と比べると、岡山より長く尾道辺りまでと同じとみられる。さらには、紀伊半島沿岸を遠征するとき、熊野で止まるよりも、さらに進んで、三重県のどこかに行くことが考えられる。

現在考えているルートは

和歌山→(国道 24 号)→五条→(奈良県道 39 号)→吉野→(28 号)

→宇陀（→伊賀→伊勢）

(→奈良盆地→近江→美濃)

である。

神武天皇紀の各記事の冒頭の文を年譜風に表にしてみる。末尾は干支における年である。

15 歲		太子	
		吾平津媛 爲妃 生手研耳命	
45 歲		東征宣言	甲寅 51
	10 月	東征開始	
	11 月	天皇至筑紫國崗水門	
	12 月	至安藝國 居于埃宮	
46 歲	3 月	徙入吉備國 起行宮以居之	乙卯 52
49 歲	2 月	到難波之碕	戊午 55
49 歲	3 月	遡流而上 徑至河内國草香邑青雲白肩之津	
49 歲	4 月	皇師勒兵歩趣龍田	
49 歲	5 月	軍至茅淳山城水門・・・進到于紀伊國竈山	
49 歲	6 月	軍至名草邑	
		天皇獨與皇子手研耳命 帥軍而進至熊野荒坂津	
49 歲	8 月	天皇使徵兄猾及弟猾者 是兩人菟田縣之魁帥者也	
49 歲	9 月	天皇陟彼菟田高倉山之巓	
49 歲	10 月	勒兵而出 先擊八十梟帥於國見丘破斬之	
49 歲	11 月	皇師大擧。將攻磯城彦	
49 歲	12 月	皇師遂擊長髓彦	

50 歳　2 月　命諸將練士卒 又和珥坂下有居勢祝者　己未 56

50 歳　3 月　東征終了宣言

即命有司經始帝宅

51 歳　9 月　納媛蹈■五十鈴媛命 以爲正妃

52 歳　正月　即位　辛酉 58

2 年　2 月　天皇定功行賞

5 年から 30 年まで記事無し

32 年　1 月　立皇子神渟名川耳尊爲皇太子

記事無し

76 年　3 月　天皇崩于橿原宮

景行天皇紀と神武天皇紀に書かれている国々に幾つかの国を追加したものを図 V06 に示しておく。

宇佐を筑紫国としたように、周防の一部も筑紫とした可能性が考えられる。すなわち、ある時点での征服地が筑紫で、その先、九州側は東を豊、西を肥、本州側は安芸と言っていたのではないか

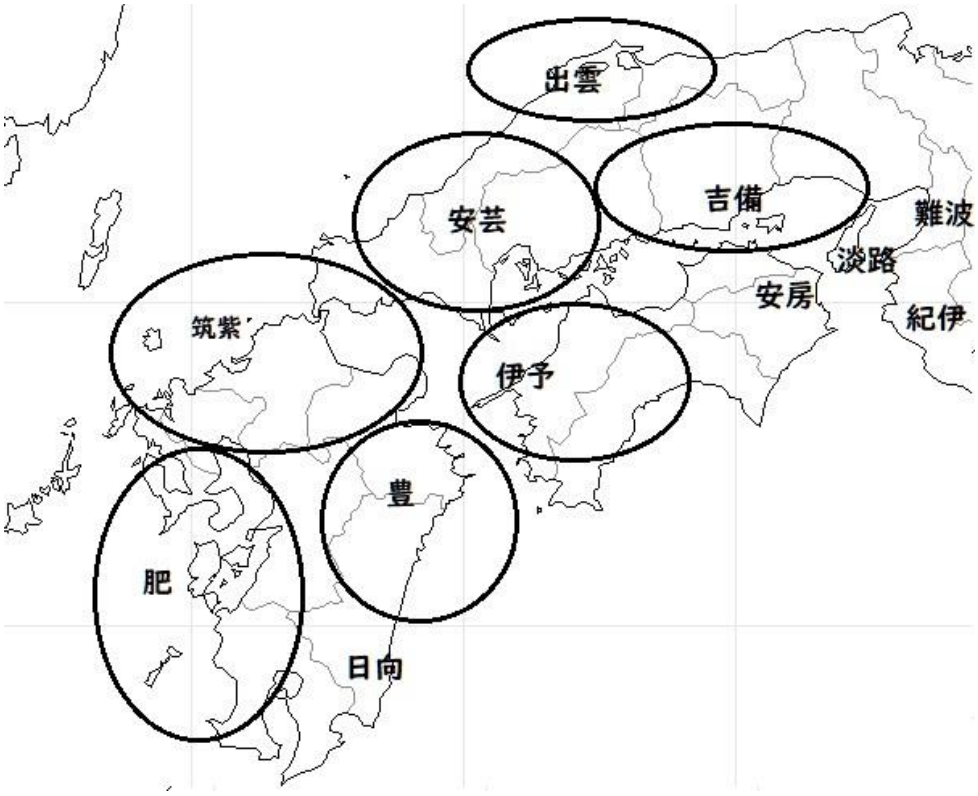

図 V06 東征前後の国々

手研耳命に関しては、前文に、

娶日向國吾田邑吾平津媛 爲妃 生手研耳命

日向国の吾田邑の吾平津媛を娶り妃とした。手研耳命を生んだ。

と、前出の

天皇獨與皇子手研耳命 帥軍而進至熊野荒坂津

の２つの記事のみである。

綏靖天皇紀前文では、

至四十八歳神日本磐余彦天皇崩 時神渟名川耳尊孝性純深 悲恭無已 特留心於喪葬之事焉 其庶兄手研耳命 行年已長 久歴朝機 故亦委事而親之 然其王立操■懐 本乖仁義 遂以諒闇之際威福自由 苞藏禍心 圖害二弟

神渟名川耳尊 與兄神八井耳命 陰知其志而善防之 於山陵事畢 乃使弓部稚彦造弓 倭鍛部天津眞浦造眞□鏃。矢部作箭。及弓矢既成神渟名 川耳尊欲以射殺手研耳命。會有手研耳命於片丘大中獨臥于大牀。時渟名川耳尊謂神八井耳命曰 今適其時也 夫言貴密 事宜愼 故我之陰謀本無預者 今日之 事唯吾與爾自行之耳 吾當先開戸 爾其射之 因相随進入 神渟名川耳尊突開其戸 神八井耳命則手脚戰慄不能放矢 時神渟名川耳尊 掣取其兄所持弓矢 而 射手研耳命 一發中胸 再發中背 遂殺之 於是神八井耳命懣然自服 讓於神渟名川耳尊曰 吾是乃兄 而懦弱不能致果 今汝特挺神武 自誅元惡 宜哉乎 汝之光臨天位 以承皇祖之業 吾當爲汝輔之奉典神祇者 是即多臣之始祖也

が書かれている。次に引用する Wiki「手研耳命」にはこの記事の大意が書かれている。これをもって訳に充てることにする。

手研耳命(生年不詳 - 己卯年11月)は、記紀に伝わる古代日本の皇族。日本書紀では手研耳命、古事記では多芸志美美命と表記される。初代神武天皇の皇子で、第2代綏靖天皇の庶兄である。神八井耳命・綏靖天皇兄弟に対する反逆伝承で知られる。

日本書紀・古事記によれば、初代神武天皇と、日向国吾田邑(現・鹿児島県南さつま市)の吾平津媛との間に生まれた皇子である。古事記では、同母弟に岐須美美命(日本書紀なし)の名を挙げる。

日本書紀神武天皇即位前紀 戊午年(即位3年前)条によると、手研耳命は神武天皇の東征に従い、熊野の荒坂津(三重県度会郡紀勢町錦か)において丹敷戸畔を討ったという。

また同書綏靖天皇即位前紀 己卯年 11 月条によると、神武天皇の没後、手研耳命は異母弟の神八井耳命・神渟名川耳尊(のちの第2代綏靖天皇)を害そうとした。そしてこれを知った神八井耳・神渟名川耳兄弟により、手研耳は片丘(奈良県北葛城郡王寺町・香芝町・上牧町付近か)の大室に臥せっていたところを襲われ、討たれたという。

古事記でも同様の説話が記されるが、日本書紀と異なり多芸志美美命(手研耳命)は神武天皇正妻の伊須気余理比売命(媛蹈鞴五十鈴媛命)を妻にしたという。さらに、彼女と神武天皇との間に生まれていた異母弟3人(日子八井命・神八井耳命・神沼河耳命)を弑逆しよう

と計画していたが、3人は伊須気余理比売命の歌で難を逃れたと記されている。

長子であるが嫡子でない。生まれたのは神武20歳ぐらいとしておこう。とすると神武天皇の即位時には30歳辺りであったことになる。記事のない 30 年を引けば、親子でなく兄弟であったかもしれない。手研耳命を押す勢力に追われ、東征にいたったということも考えられる。あるいは、倭の故地を再支配する派と、朝鮮派放置し東を攻略する派との抗争があったかもしれない。このような西派と東派の抗争ともとらえられるものとして、源平の戦いや征韓論など、この後何度か見られる。

応神天皇と菟道稚郎子との類似性を感じる。

Wiki「菟道稚郎子」に次のことが書かれている。

播磨国風土記には宇治天皇の世という記載があり、事績は見えないがこの宇治天皇は菟道稚郎子を指すと見られている。

12. 古代の海岸線　（縄文海進）

序

神武天皇紀での難波之碕到着後の経路が感覚的になにかしっくりこなかった。何故だろうかと古墳時代の地理的状況を調べてみると、河内湖や奈良湖(大和湖)の存在や大和川の付替え等がわかってきた。奈良湖の存在を仮定すれば、疑問V04、神武天皇記で、奈良盆地の中央部が何故現れないか、は解ける。

北は淀川の河口部、東は河内湖、あるいは、湖沼地帯ということを考えれば、大坂冬の陣における真田丸の重要性がわかる。また、織田信長の石山本願寺攻めが手間取ったのも理解できる。この場合、違いが無いのかもしれないが、物資の補給を阻止できるだけの海軍力があれば攻め落とすのは容易ではなかったと思われる。

縄文海進という用語は漠然とは覚えていたが、数千年前のことで古代史にはあまり関係ないと思ってきた。しかし、考えてみれば、海進の後の後退は時間をかけて為されたはずで、古墳時代に終わっていなければ、当然考慮すべきである。

古墳時代の前は弥生時代でその前は縄文時代である。

Wiki「縄文時代」では

縄文時代は、日本列島における時代区分の一つであり、世界史では中石器時代ないしは、新石器時代に相当する時代である。旧石器時代と縄文時代の違いは、土器と弓矢の発明、定住化と竪穴式住居の普及、貝塚の形成などが挙げられる。始期と終期については多くの議論があるが、まず始期に関しては一般的に 16,000±100 年前と考えられている。終期は概ね約 3,000 年前 とされる（諸説あり）。地質年代では更新世末期から完新世にかけて日本列島で発展した時代であり、その年代については、紀元前数世紀から紀元前 10 世紀頃までで、多くの議論がある。

Wiki「弥生時代」では

弥生時代は、日本列島における時代区分の一つであり、紀元前 10 世紀頃から、紀元後 3 世紀中頃までにあたる時代の名称。採集経済の縄文時代の後、水稲農耕を主とした生産経済の時代である。縄文時代晩期にはすでに水稲農耕は行われているが、多様な生業の一つとして行われており弥生時代の定義からは外れる。

Wiki「古墳時代」では

古墳時代は、日本の歴史の時代区分の一つである。古墳、特に前方

後円墳が盛んに造られた時代を意味する。縄文時代、弥生時代に次ぐ考古学上の時期区分である。古墳時代の時期区分は、古墳の成り立ちとその衰滅をいかに捉えるかによって、僅かな差異が生じる。例えば、前方後円墳が造営され始めた年代に関しても、議論が大きく揺れ動いてきた。現在のところ一般的に、古墳時代は 3 世紀半ば過ぎから 7 世紀末頃までの約 400 年間を指すことが多い。中でも 3 世紀半ば過ぎから 6 世紀末までは、前方後円墳が北は東北地方南部から南は九州地方の南部まで造り続けられた時代であり、前方後円墳の時代と呼ばれることもある。前方後円墳が造られなくなった 7 世紀に入っても、方墳・円墳、八角墳などが造り続けられるが、この時期を古墳時代終末期と呼ぶこともある。

と書かれている。

　各時代の基準は異なり、両者が入り混じるグレー・ゾーンや、場所により時代区分のずれが考えられる。弥生時代の水稲農耕を主とした生産経済とすれば、下限はかなり下がると思われる。土器による区分が紛れが少ないと思われるが、可能かどうかわからない。

　古代においては、文化の伝播は人の移動により行われたと考えている。

弥生時代は紀元前 10 世紀頃から紀元後 3 世紀中頃までとすれば、応神天皇とは 100 から 200 年程なので、海岸線はかなり近いはずである。

本稿で対象としている時期は、ほぼ古墳時代と重なる。前方後円墳と装飾(壁画)古墳が意味をもつと考えているが、今後の検討課題としておく。

12.1.　海進

Wiki「縄文海進」では

縄文海進は、縄文時代に日本で発生した海水面の上昇のことである。約6,500年前-約6,000年前にピークを迎え、ピーク時の海面は現在より約5m高く、気候は現在より温暖・湿潤で平均気温が1-2℃高かった。地質学的には有楽町海進、完新世海進、後氷期海進などと呼ばれる。

最終氷期の最寒冷期後、約19000年前から始まった海面上昇は、沖積層の堆積より速かったので、日本では最終氷期に大河によって海岸から奥深くまで浸食された河谷には海が入り込み、関東平野では古鬼怒湾(鬼怒川)や奥東京湾(利根川、渡良瀬川、荒川(当時は入間川)、元荒川(当時の荒川)など。荒川付近の水域は古入間湾とも呼ばれる)を形成し、大宮台地などは半島となっていた。その後は沖積層の堆積が追いつき、上記の湾は現在の低地平野となった。

縄文海進は、貝塚の存在から提唱されたものである。海岸線付近に多数あるはずの貝塚が、内陸部で発見されたことから海進説が唱えられた。当初は、日本で活発に起きている火山噴火や地震による沈降説も唱えられたが、その後、海水面の上昇が世界的に発生していたこ

とが確認され裏付けられた。

この時期は最終氷期終了の後に起きた世界的に温暖化の時期に相当する(完新世の気候最温暖期)。また、北半球の氷床が完新世では最も多く融けていたため、世界的に海水準が高くなった時期に当たる。この温暖化の原因は地球軌道要素の変化による日射量の増大とされている。しかし、日射量のピークは9000年前であり、7000年前の海進と異なる。近年の地球温暖化の議論では、過去の温暖化の例として、小説などでもしばしば取り上げられている。

弥生海退については、「弥生の小海退」の海水準低下レベルの測定、田辺 晋(産総研)・堀 和明(名古屋大)、(国土地理協会第13回学術研究助成(平成25年度) 報告書)の冒頭に

http://www.kokudo.or.jp/grant/pdf/h25/tanabe.pdf

「弥生の小海退」とは 3～2 千年前に現在よりも海水準が 2m ほど低下したとされる現象である. この現象は, 1960 年代に豊川平野(井関, 1963)や佐賀平野(有明海研究グループ, 1965), 富山湾岸(藤井, 1965)において, 弥生時代の遺跡や埋没林が現在の海水準よりも下位に発見されたことを契機に提唱されるようになった.

と書かれている。

Wiki「平安海進」では

平安海進とは、8 世紀から 12 世紀にかけて発生した大規模な海水準の上昇(海進現象)のこと。ロットネスト海進とも呼ばれているが、日本における当該時期が平安時代と重なるためにこの名称が用いられている。

ローズ・フェアブリッジ教授(英語版)の海水準曲線によると、8 世紀初頭(日本の奈良時代初期)の海水面は、現在の海水面より約 1 メートル低かった。10 世紀初頭には現在の海水面まで上昇した。11 世紀前半には現在の海水面より約 50 センチメートル低くなった。12 世紀初頭に現在の海水面より約 50 センチメートル高くなった。

日本においても平安海進の影響は大きく、特に縄文海進の時にも大規模な海進が生じた関東地方ではそれが顕著であった。例えば、戸籍の一部が残されていることで知られている下総国葛飾郡大嶋郷は現在の東京都葛飾区及び江戸川区の太日川(江戸川)の自然堤防及びその周辺にあったと推定され、現地では大嶋郷の集落の一部とみられる遺跡(葛飾区の新宿町遺跡など)が発見されているが、8 世紀まで順調に発展してきた集落が 9 世紀に入ると突然姿を消している。それを裏付けるかのように承平年間に著された和名類聚抄の郷名の一

覧からは大嶋郷の名前は姿を消している。こうした変化は海進によって現在の東京低地(東京都の下町地域の低地)への大規模な海水の浸水・荒廃化をもたらしたことが原因と考えられ、また周辺地域の陸路・水路の交通路や交易圏の動向にも大きな影響を与えたと考えられている。しかし一方で、同地域の江戸川沿いの海抜は比較的高く、0.5メートルほどの海進では水没しない地域が大半であるため、大嶋郷の荒廃化について原因は定かではない。

と書かれている。

12.2.　Flood Maps

河内湖と奈良湖の存在は多くの歴史書では取り挙げられていない。これにより、幾つかの疑問は解決され、また、再考を要することでてくるであろう。

人が暮らすには、海水面(平均海水位)よりも最高潮位のほうが重要であろう。湖水では降雨による水面の上昇もある。冠水位という用語はないようである。湖水位面の上下には地形も大きく影響するであろう。例えば、100mm の雨が 1 時間で降った場合、琵琶湖の水面がどうなるかなどが、シミュレーション、あるいは、予測が可能なものであろうか。

滋賀県のホーム・ページに「明治 29 年琵琶湖洪水水害概要」

https://www.pref.shiga.lg.jp/suigaijyouhou/gaiyou/105764.html

では、

9 月 3 日から 12 日の 10 日間で 1008mm の雨量(平均降水量の 6 割に達する)を記録、特に 7 日には 597mm(彦根)を記録した。このため琵琶湖水位は＋3.76m の過去最高水位を記録した。浸水日数は 237 日にも及んだ。

と書かれている。堅田の浮御堂の写真からは、床面は湖水面より 4-5m 程高い。

とにかく、他に手掛かりとなるものがないかとしらべていたら、Flood Maps という web site を見つけた。url は

http://flood.firetree.net/?ll=33.8339,129.7265&z=12&m=7

である。

Flood は洪水である。現在の海水面を上げたら海岸線はどうなるかが見られるものである。これは、Google Map の API を利用して、海水面をメーター単位で上下した場合の海岸線を示した地図を作製できるものであり、画面の保存が可能である。

「海面上昇による浸水をシミュレートできる Flood Maps」
https://nlab.itmedia.co.jp/nl/articles/1109/20/news101.html

では

海面がどの程度上昇すると、どの地域が浸水するかを Web サービス Flood Maps でシミュレートできる。Google マップと米航空宇宙局(NASA) のデータを利用したサービスで、画面左上の Sea level rise(海面上昇) で海面がどれだけ上昇するかと設定すると、地図上に浸水する地域が青で示される。

地球温暖化による影響を示すために、英国の技術者アレックス・ティングルさんが2006年から公開している。ティングルさん自身、NASAのデータがあまり正確でないことや、場所によって精度が落ちることを認めており(海岸部の防御対策も考慮に入れていない)、ある程度の目安として考えるのがいいだろう。

と紹介されている。

海水面の上げ幅はメートル単位で、1-7, 9, 13, 20, ・・・と選択できる。海面レヴェルの設定値を得る為、河内湖の図V03と比較すると、plus 4m と plus 3m が候補として残った。両者を次図で示す。

図 V07 Flood Maps 大阪 +4m(左) +3m(右)

図 V03「河内湖」にどちらが近いかであるが、上町台地の形から左のほうの +4m が近いと判断する。

縄文海進は約 6,500 年前-約 6,000 年前にピークを迎え、ピーク時の海面は現在より約 5m 高いということである。概算で 8,000 年で 5m を年平均でみれば、0.6m 程となる。古墳時代では 1m 強程となる。この概算からは、かなり高いとも思えるが、淀川と大和川の沖積作用を考えれば、そんなものかと思える。

以後、引用する Flood Maps は +4m とする。

面白いので、幾つかの地域を見ていくことにする。

瀬戸内海東部

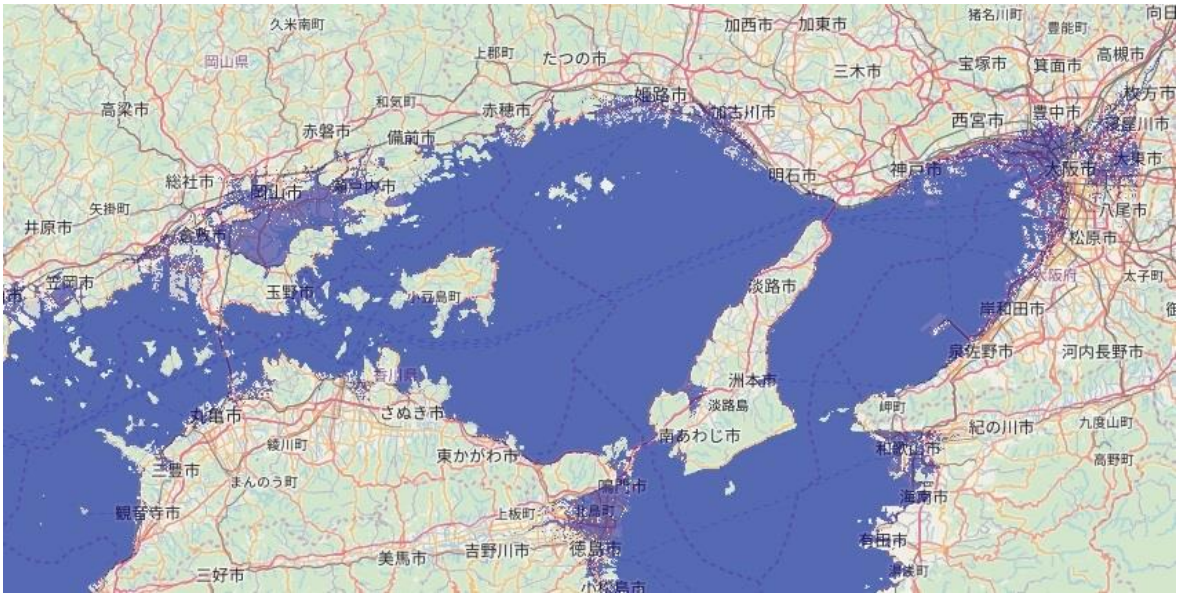

図 V08 Flood Maps 瀬戸内海東部

大阪湾以外で大きな変化の見られるのは岡山(児島湾)である。他には、徳島・和歌山・姫路などが挙げられ、いずれも大きい川の河口に位置している。この図のレヴェルでは四国の瀬戸内側は殆ど変化が見られない。これは、沖積平野が少ないことを示していると考える。これからは、四国の瀬戸内海側は大きな勢力はなく、倭の水軍にとっては征服しやすいといえる。

淡路・阿波(徳島)

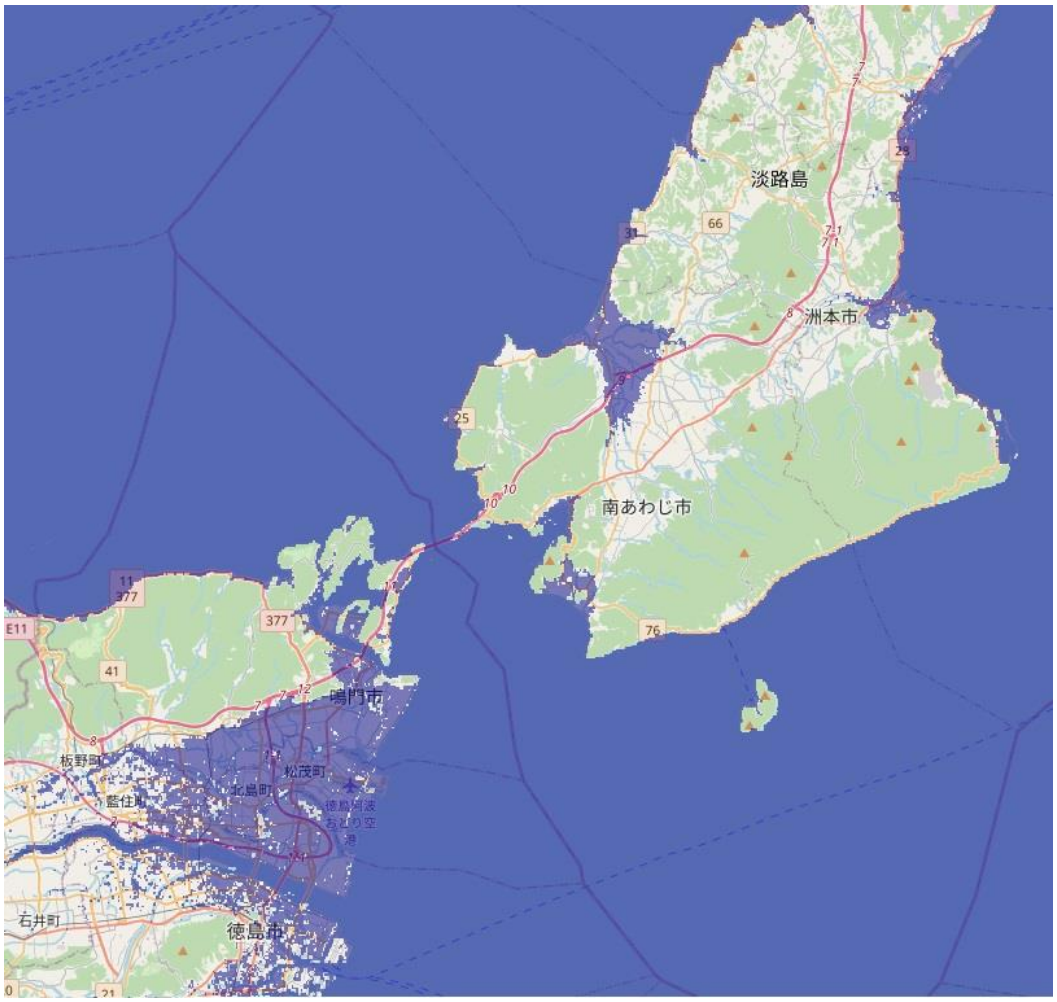

図 V09 Flood Maps 淡路・阿波(徳島)

徳島市の中心部は殆ど水面下となる。四国の北岸から淡路島までの制圧は玄界灘沿岸の制圧と同じ程度ではなかったかと考える。

岡山

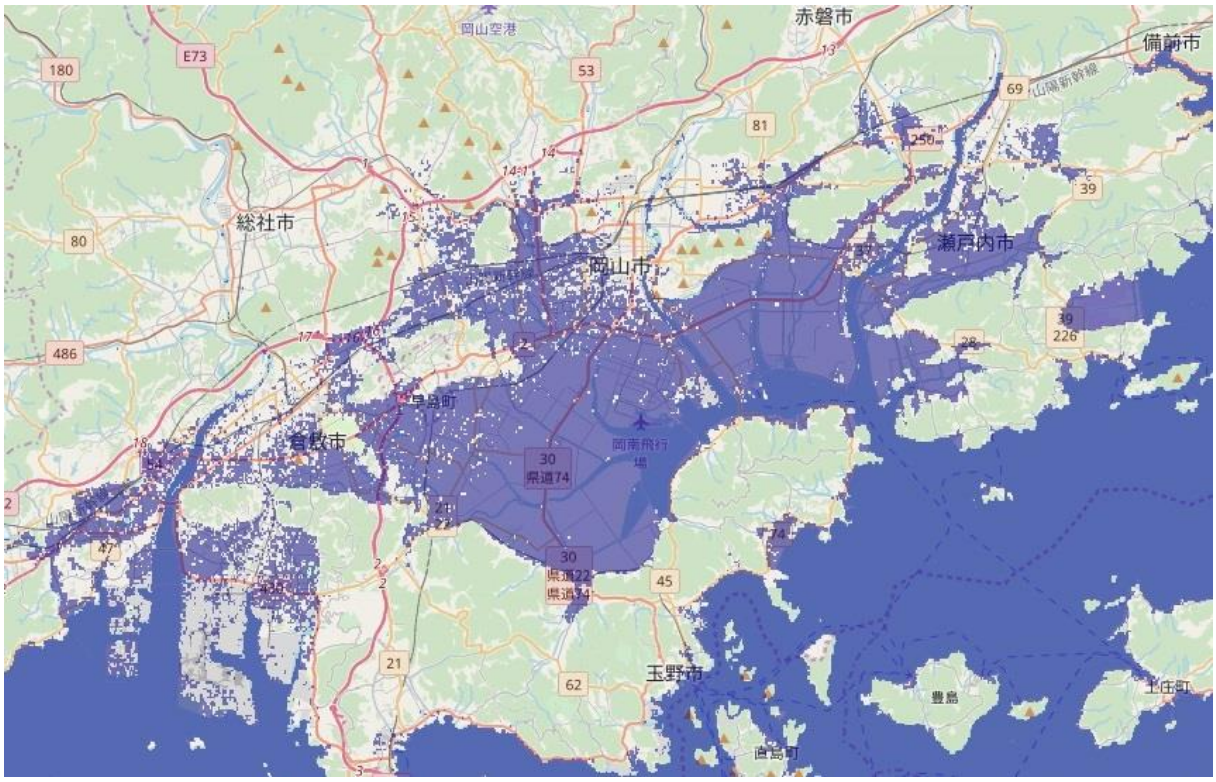

図 VIO Flood Maps 岡山

図 VIO では、倉敷辺りが海となり、児島半島までで淡路島に匹敵する島である。岡山市の中心部の大半は海面下であり、児島の周りは航行可能と思われる。九州の糸島とよく似た状況である。この図の真ん中上部やや左の島に吉備津神社がある。吉備津は実際に(海に臨む)津であったことになる。

広島

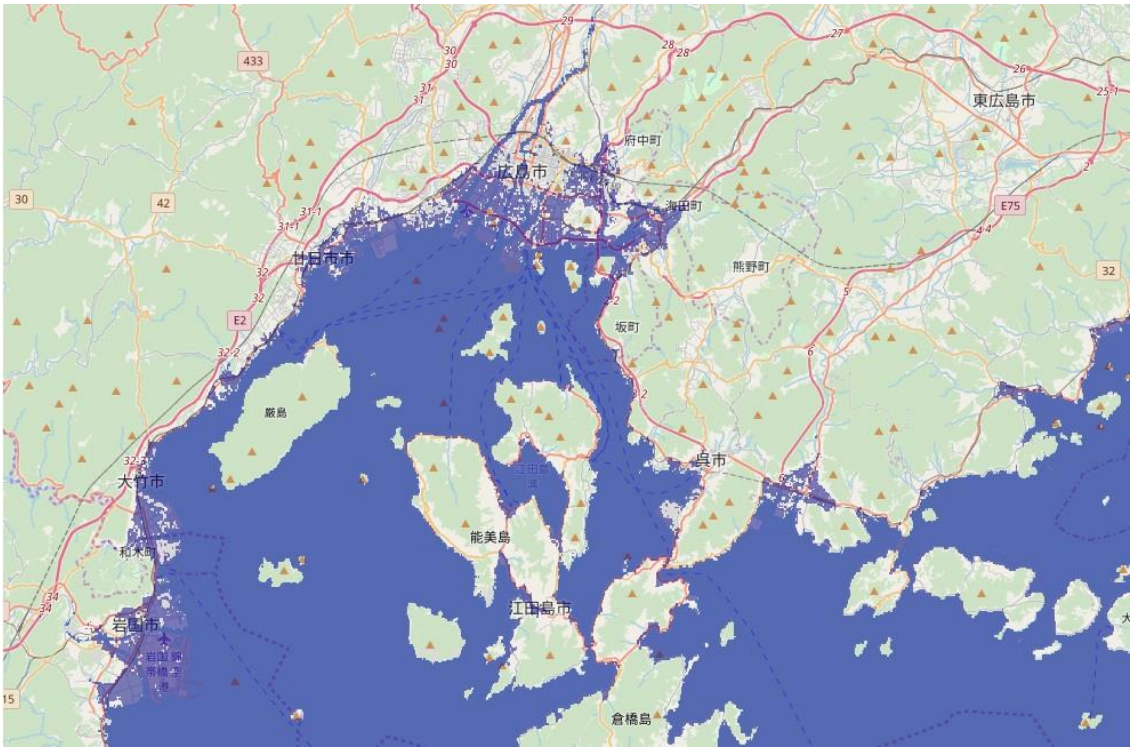

図 VII Flood Maps 広島

宇品が島となっている。

Wiki「宇品」では

宇品という地名は広島湾頭の一島嶼の名称として歴史に登場する(現在の元宇品)が、現在の宇品地区は、宇品築港事業(1884 年、明治 17 年着工)の結果造成された広大な新開地(埋立地)として成立した。

と書かれている。また、同サイトには次の 広島新開地発展図も貼られている。

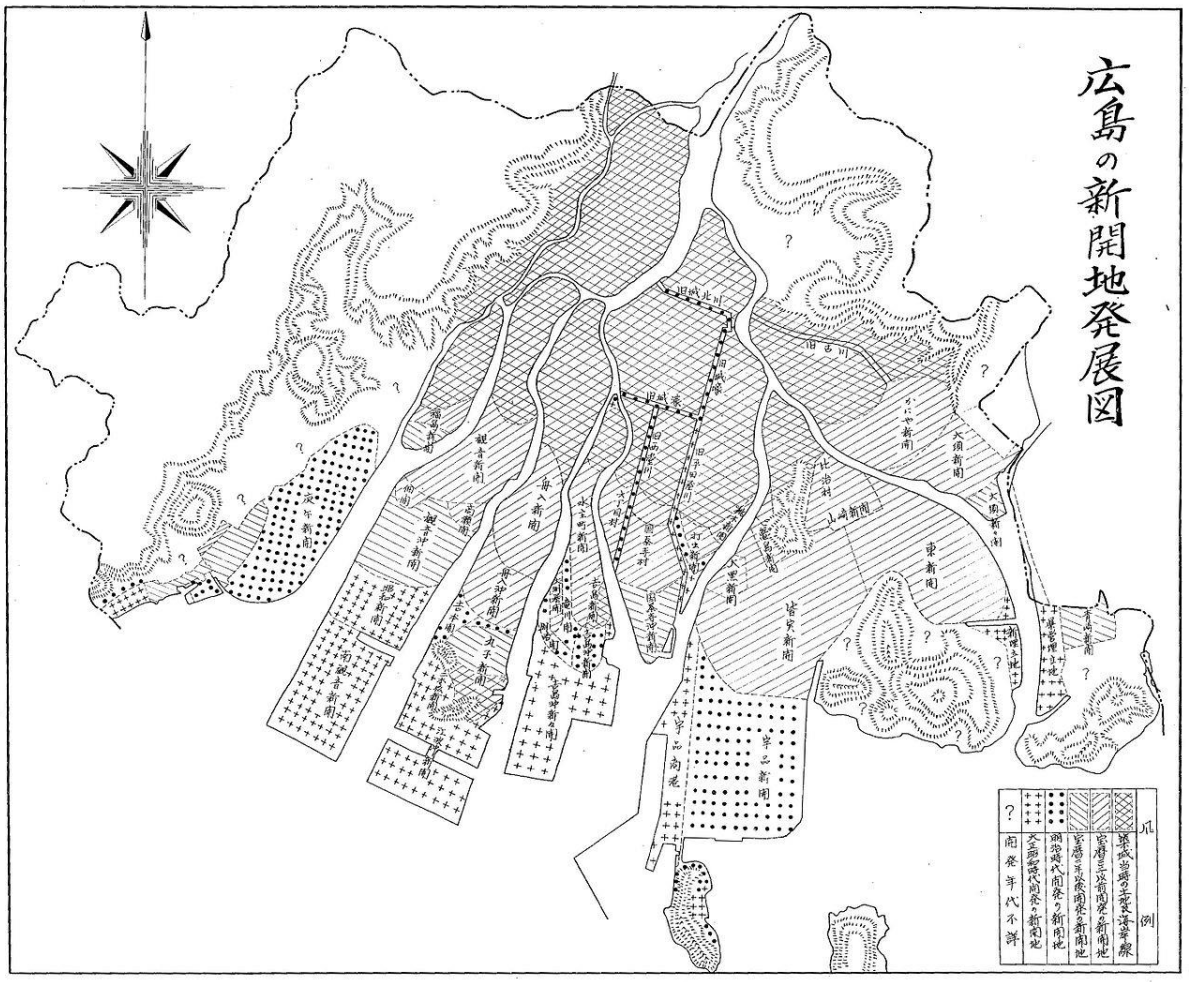

図 VI2 広島新開地発展図

松山

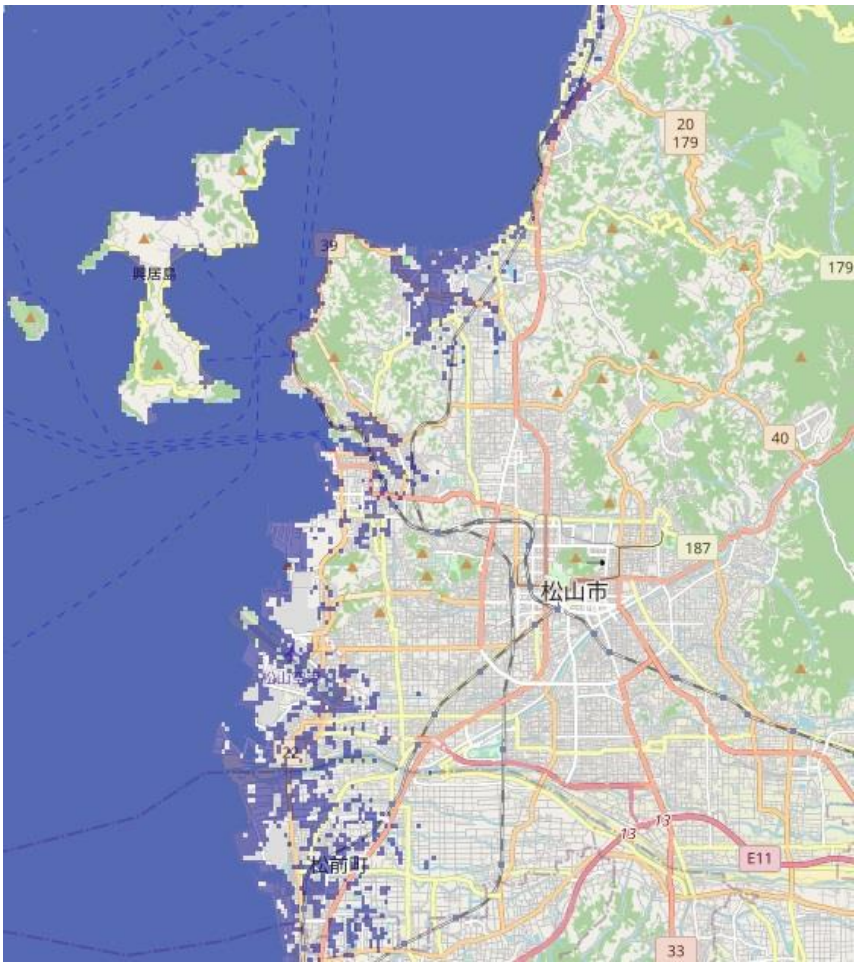

図 VI3 Flood Maps 松山

大山寺のある地区が半島状になっている。県道 219 号線以西は、かなりが海となっている。

伊勢湾

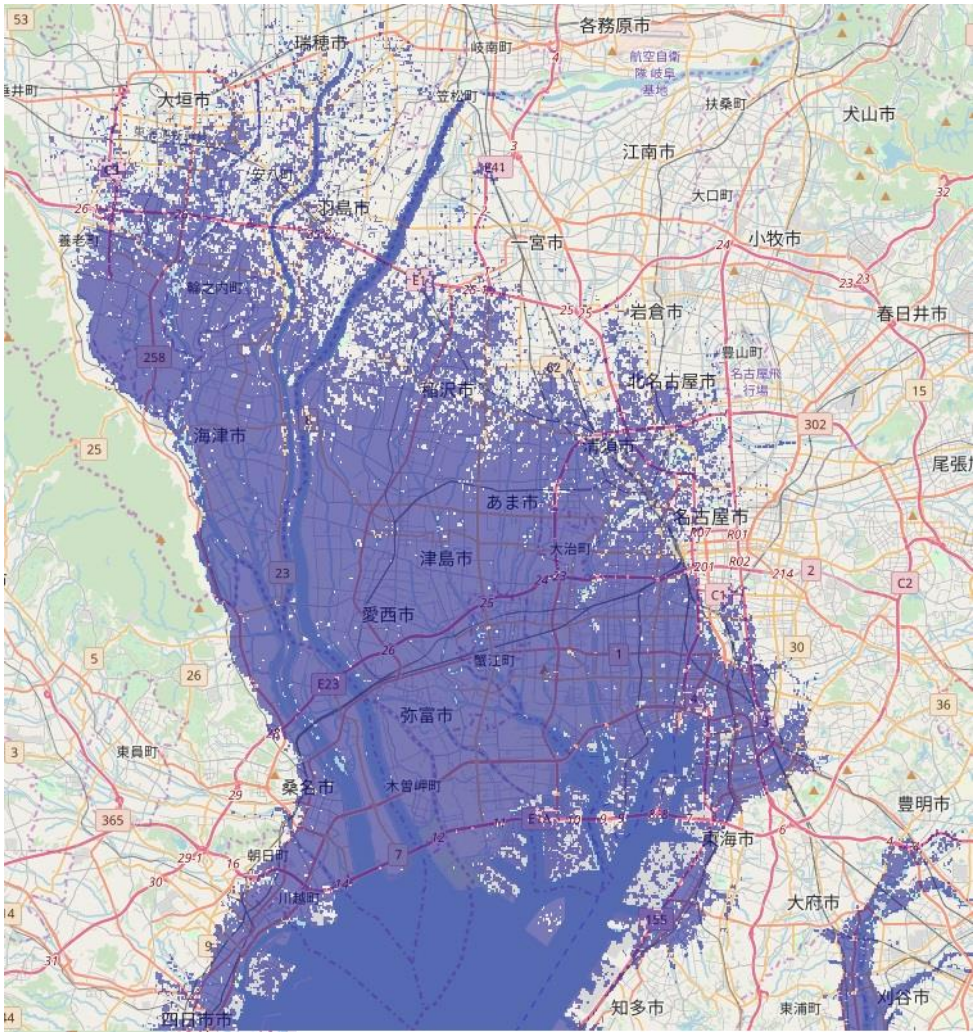

図 VI4 Flood Maps 伊勢湾

伊勢湾というよりは、濃尾湾、あるいは、伊尾濃湾である。濃尾平野と名古屋市の旧市街の大半は海底か干潟である。

その輪郭は、東の名古屋市部分はほぼ東海道線、あるいは、名古屋鉄道本線で、これは国道１号線(東海道)と近接して並行している。西

は養老鉄道で、北は微妙であるが、愛知県側は名神高速と思っておけばよいであろう。岐阜県側は大垣市辺りまでとなっている。現在の1号線は熱田神宮から桑名へほぼ直線で通じている。江戸時代にはこの線が航行可能な北限であったようである。近鉄名古屋線はこれにほぼ並行している。

明日香(藤原京)から伊勢湾に行く場合、近鉄大阪線に沿って東進するのが最短である。伊勢湾にでたところに伊勢神宮がある。
ここで、伊勢湾を渡ることになる。これには、海路と陸路の選択となる。伊勢神宮あたりから直接知多半島を目指すのは、航路も長く湾口では波も高く危険である。江戸時代に七里の渡しという七里の渡しは桑名と熱田神宮の間である。桑名市に多度大社がある。

Wiki「七里の渡し」

元和2年1616年、東海道における唯一の海上路で七里の渡しが始まった。七里の渡しは、満潮時に陸地沿い航路が約7里で、干潮時に沖廻り航路が約10里であった。

海上を避ける迂回路としては、脇往還の佐屋街道があった。宮宿、桑名宿は渡船場として賑わい、旅籠屋数でそれぞれ東海道における1

位と２位の規模を誇った。

図 VI5 七里の渡し 脇往還

陸路でさらに東に進むためには、大垣まで北上する必要がある。古代において、近江に遷都が行われたのは東国経営の為ではないか。京都への野菜の供給元として、近江・美濃は現在でも重要である。

浜名湖

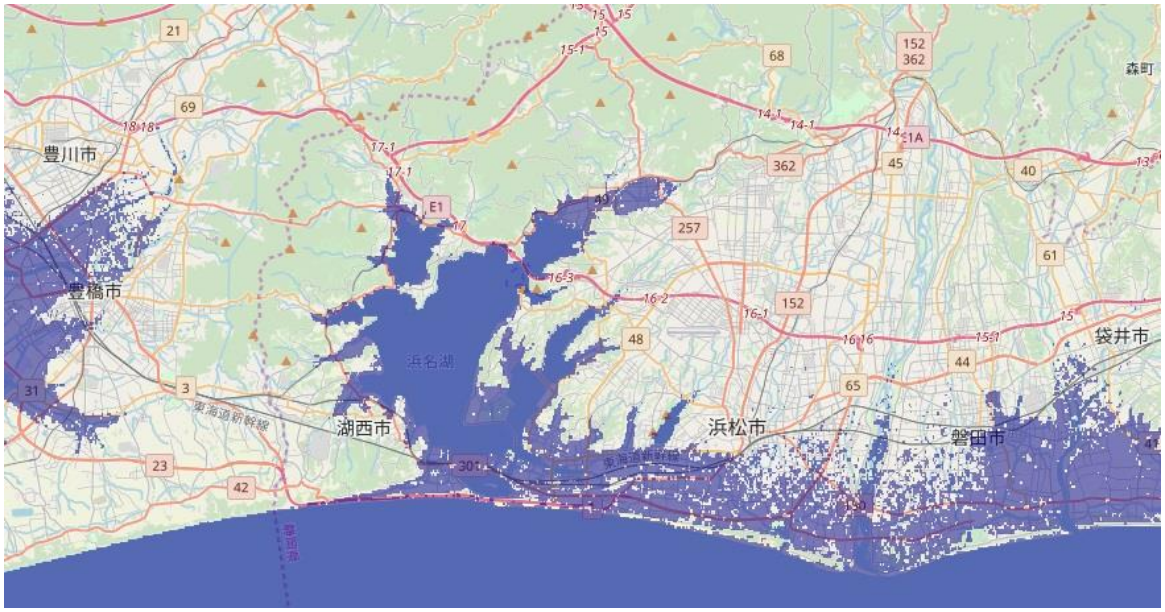

図 VI6 Flood Maps 浜名湖

浜松市・磐田市・袋井市の市街地の大半は水面下となっている。この部分の東海道は全て海面下となる。現海岸線が砂州状になっているが、これは、砂が波の作用で海岸部に堆積された結果と考える。

Wiki「姫街道」では

姫街道は、浜名湖の北側、本坂峠を経由して東海道見附宿東海道御油宿を結ぶ街道である。道程約 60 キロメートル。古くは東海道の本道で、二見の道と呼ばれていた。中世以降、浜名湖南岸の往来が盛ん

になると長距離を移動する利用者は減り、地震などで浜名湖南岸が通行不能になった後に迂回路としてよく利用された。戦国時代に街道が整備され、江戸時代には東海道に付属する街道とされ、宿が置かれた。

図 V17 姫街道

浜松と豊橋の間は、東名高速がこれに近い。

関東

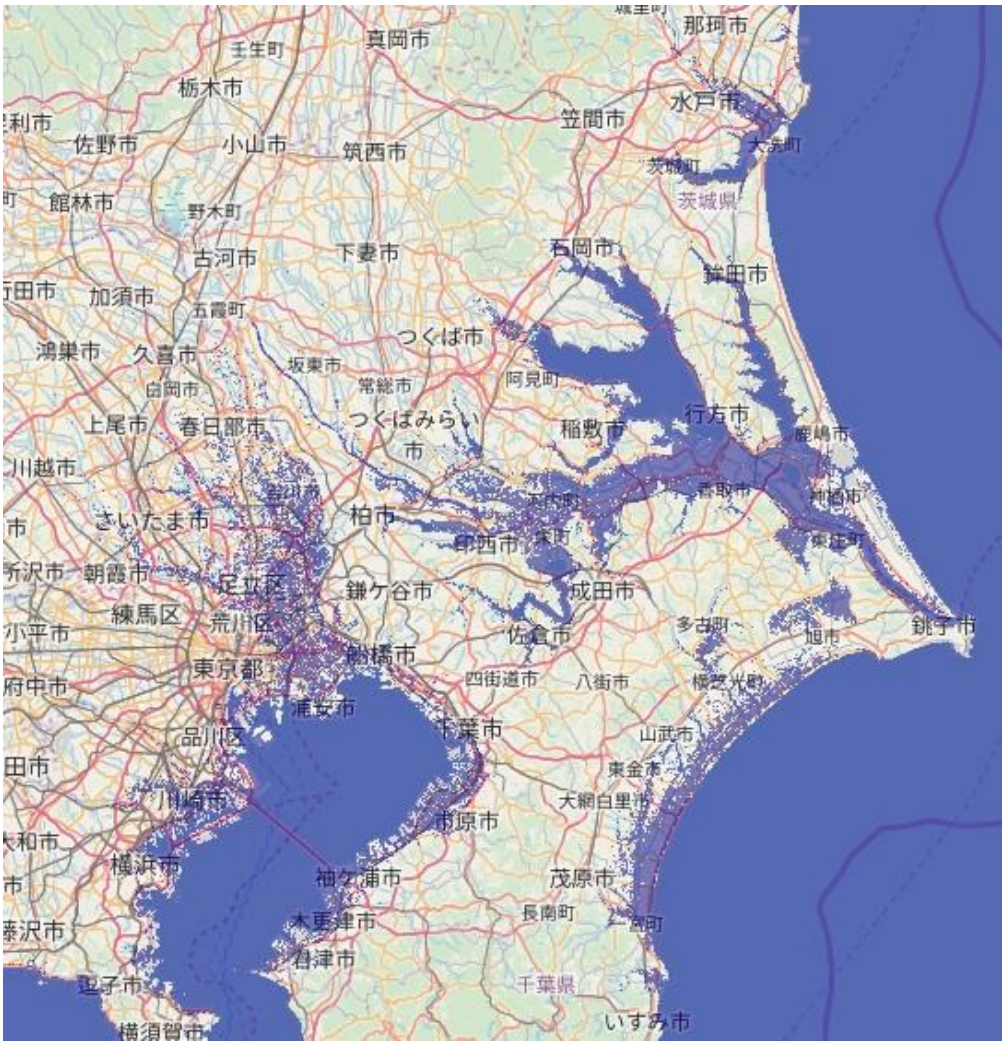

図 VI8 Flood Maps 関東

今の千葉県がほぼ島となっている。利根川は東京湾に流れ込んでいた。九十九里浜は遠州灘と同様であろう。鹿島灘沿岸の砂州状の部分は本からの地形と思われる。

利根川付け替えについては、多くのサイトで報告されている。この中で、付け替え前の図で、見やすいものとして、

大地への刻印「土地に応じた開発」生まれ変わる湖、関東平野

https://suido-ishizue.jp/daichi/part2/03/05.html

に図をを引用しておく。

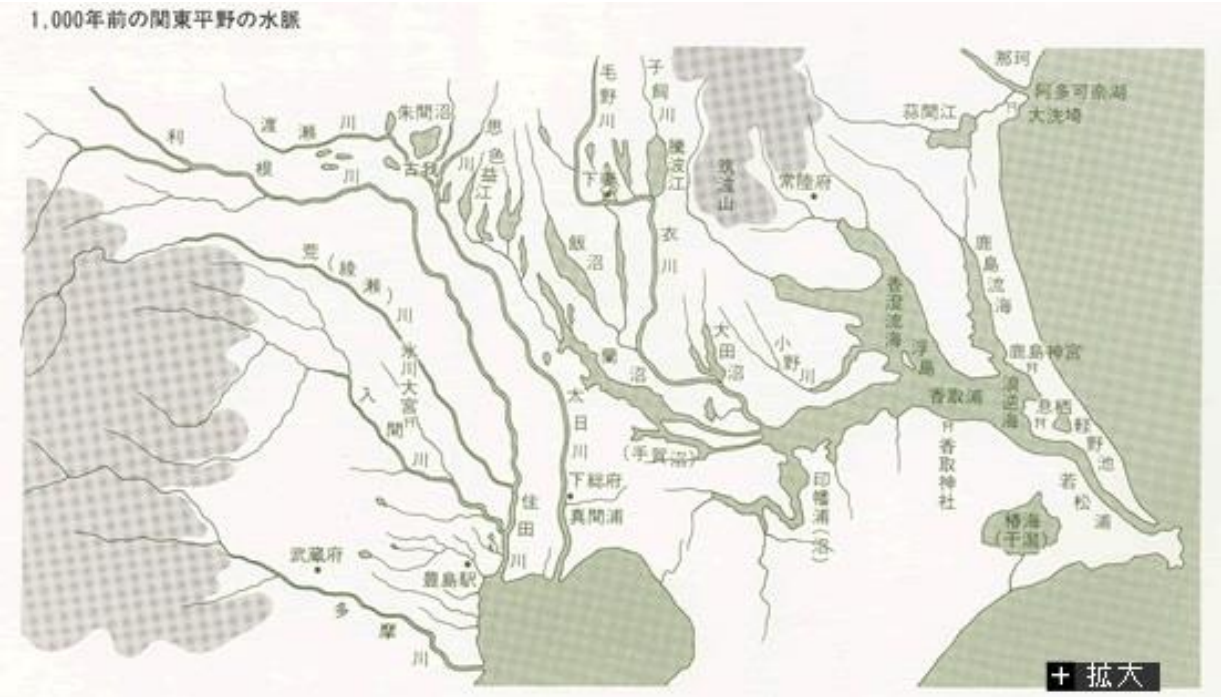

図 V19 1,000 年前の関東平野の水脈

香取神宮・鹿島神宮の位置は、上総国を制圧していることと、圧倒的な水軍を有しているという状況では、伊勢神宮や宇佐神宮などと

似た、戦略的価値をもつと考えられる。

図 V18 と図 V19 を比べてみると、霞ケ浦周辺はよく似た状況である。これに比べて、霞ケ浦の西の部分と、東京湾の奥は、図 V19 のほうが、水面が広い。東京都区部では、豊島区辺りまでが水面になっている。これは、霞ケ浦周辺は自然の状況であったのに対し、江戸周辺は、低地を埋めるなどにより、人工的にかさ上げが行われた結果と考える。

九州北部

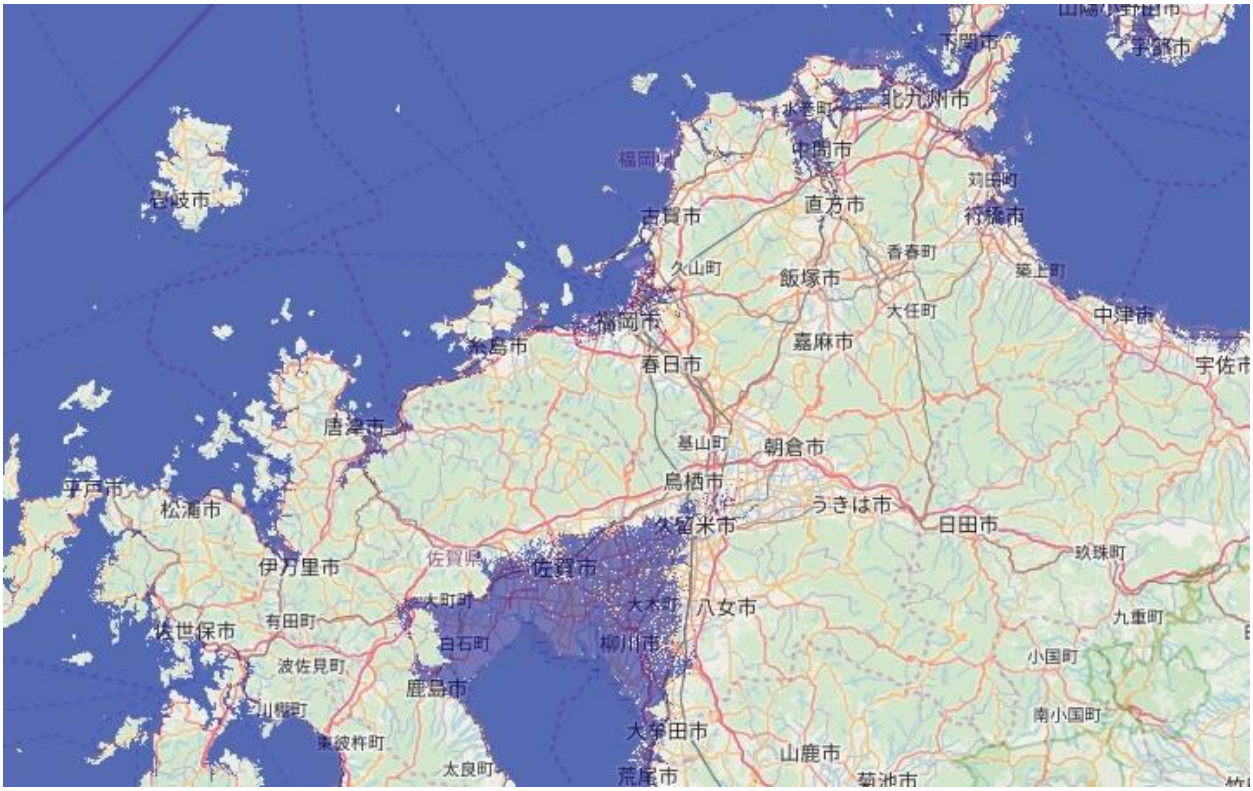

図 V20 Flood Maps 九州北部

九州北部で目につくのは、有明海北部と、遠賀川河口である。

まず、有明海の海岸線を見ていく。東は九州新幹線(鹿児島本線)の矢や西である。北の東の部分は国道 34 号線、西の部分は長崎自動車道と長崎本線の中間辺りとなる。吉野ヶ里遺跡は、この切り替わり地近くにあり、海に面していたことになる。

遠賀川河口を見ていく。河口部が湖になっていて、河内湖と似た状

況である。これを、筑紫湖とよぶことにする。図 V03 河内湖 で引用したサイトに書かれている研究が遠賀川河口部についても行われれば、明確になるであろう。上記サイトで引用している J-shis Map http://jwsvm001.bosai.go.jp/map/ を眺めると、遠賀川河口部と有明海北部は河内湖と同じように思える。(画像の取り込みに失敗しました。)

図 V20 からは、直方市辺りまで水行が可能であったのではないか。また、若松区は糸島と似た状況の島となっている。これは、糸島・吉備や河内湖の状況と似ている。

中国

中国もついでに見ておく。海水面の設定は、江河の沖積効果を山勘で考慮し、＋6m とした。

図 V21 Flood Map 渤海湾

天津市は海面下となっている。

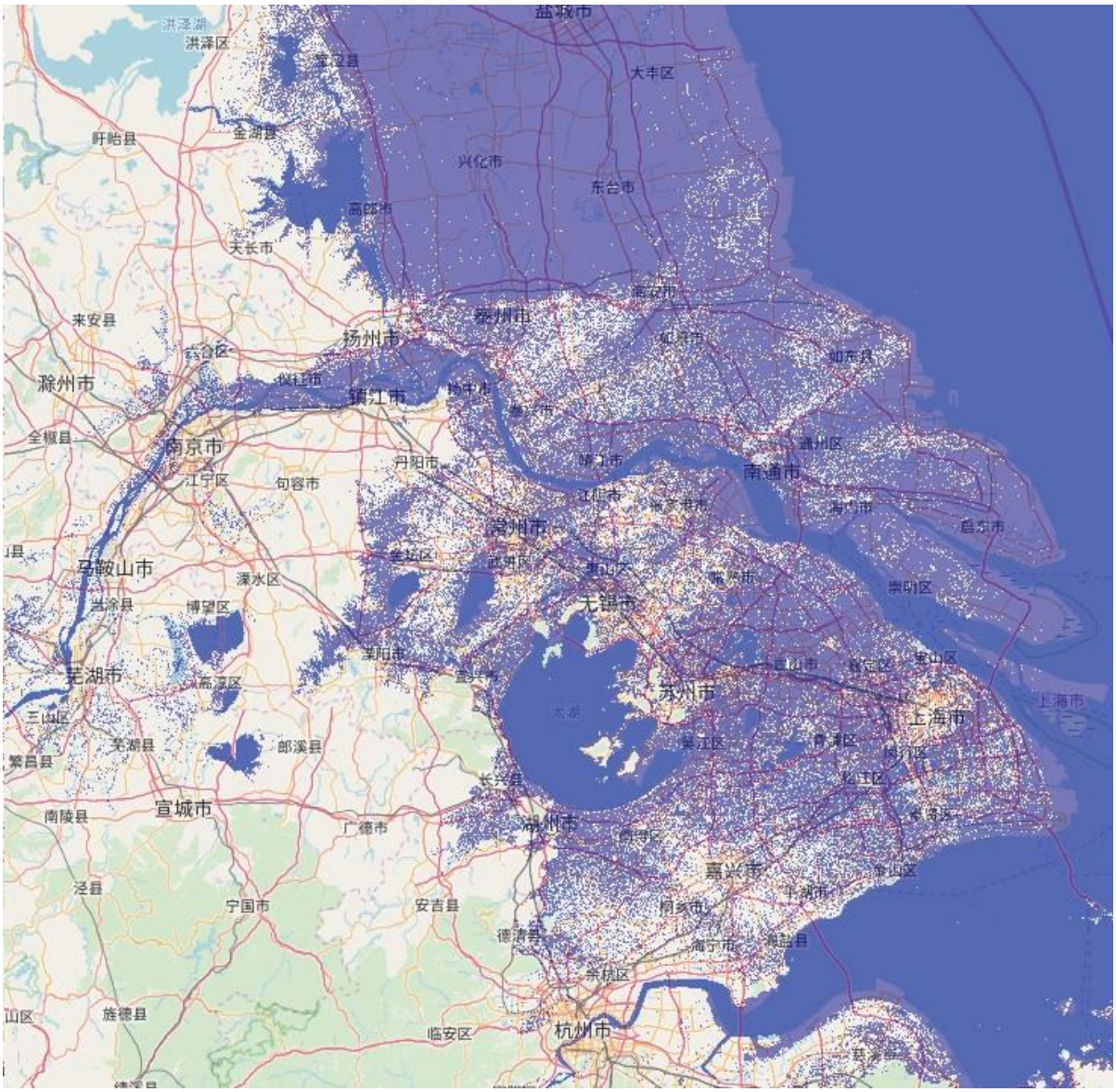

図 V22 Flood Map 南京から上海

東海岸の主要な都市は海面になる。

12.3.　旅程再考

不弥国までのFlood Mapsの地図を見た後、投馬国・邪馬壱国を考察していくことにする。

旅程の記事から、各国間の距離と各国の戸数をみる。

	末盧国	四千余戸	
東南陸行五百里	伊都国	二万余戸	郡使往來常所駐
東南百里	奴国	二万余戸	
東行百里	不弥国	千余家	
南水行二十日	投馬国	五万余戸	
南水行十日陸行一月	邪馬壱国	可七万余戸	

後漢書では、楽浪郡は、18城(県)、61,492戸、257,050人である。邪馬壱国の戸数は楽浪郡を越えることになり、数値的には疑問を抱く。晋書では、楽浪郡は、6 県、3,700 戸である。また、帯方郡は、7県、4,900戸である。両者併せて、13県、8,600戸で、後漢の楽浪郡と比べ、かなり衰退している。韓人が逃亡したのであろうか。

なお、三国志には志がない。

戸数としては、旅程の国々は多い気がする。国の大きさを表しているという程度に用いることにする。

Part Ⅰ で、末盧国は「唐津市辺りか」としたが、現在では、東松浦半島も唐津市になっている。名護屋城跡辺よりも加部島が有力と考えている。

伊都国は、糸島かその対岸かであるが、九州大学のキャンパス造成に伴い、全面的に発掘された元岡・桑原遺跡群のある元岡辺りが現在の第１候補である。元岡は最北端の岬の真下になる。

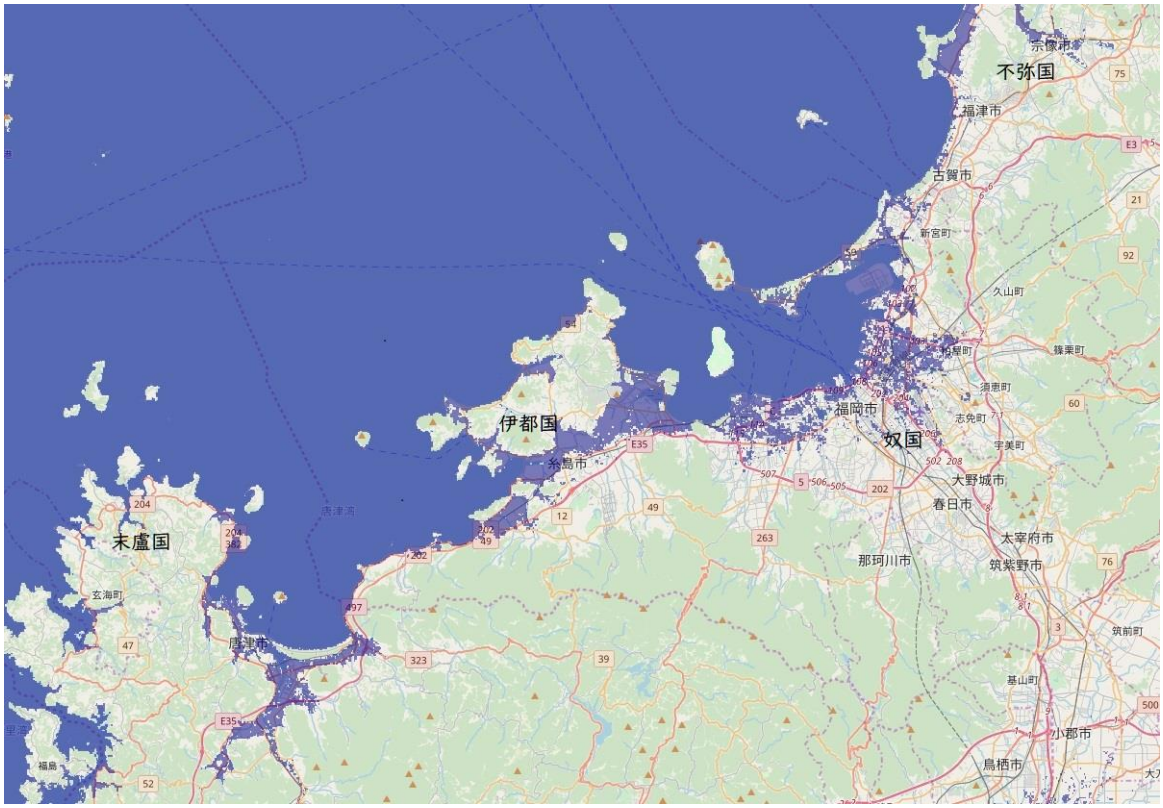

図 V23 Flood Maps 福岡

図 V20 で福岡の部分を少し大きくしたものに、不弥国までの 4 国を書き込んだのが図 V23 である。この 4 国の間隔はほぼ同じになっている。元岡は「伊都国」の国の東になる。陸行とすれば、海岸部を迂回することになり、距離の比はほぼ合っている。

元岡・桑原遺跡群については、

「九州の大製鉄コンビナート　福岡 元岡製鉄遺跡群を訪ねて」

http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/iron/7iron12.pdf

で、元岡製鉄遺跡群の概要が書かれている。

全国遺跡報告総覧

https://sitereports.nabunken.go.jp/ja

で、書名「元岡・桑原遺跡群」シリーズ「福岡市埋蔵文化財調査報告書」で検索すれば、同報告書Ⅰ－24 がダウン・ロードできるが、これらは素人が簡単に読めるものではない。

奴国は福岡市中心部辺りとした。金印で有名な志賀島は、旅程の戸数とからは、少し小さい気がし、筥崎宮か香椎宮辺りが候補と考えている。

不弥国は旅程の距離から、宗像市辺りと考えた。ここまでは、諸説でもほぼ同じと考えている。

投馬国以降を検討する。不弥国からの旅程を再掲しておく。

不弥国←水行二十日→投馬国←水行十日 陸行一月→邪馬壱国

Part Ⅰで、野生号の記事で、呼子(唐津市、唐津と名護屋の間)と志賀島の間を4日かかったことを見た。この場合は 乗船者＝漕ぎ手のようであった。実際に荷物と乗客があった場合にはどうなるかの実験があれば面白い。比較に絞れば、同じ船を2隻準備し、漕ぎ手だけと、人と荷物を載せたもので、静水と川を想定した緩やかな流水で行うのが一番望ましいが、1隻で状況を変えて行うだけでも貴重である。帆走の考慮も必要となる。

当時帆走はどのような状況であったか、また、図 V23のような島の間を縫っていく場合、帆走が可能かなどの問題が考えられる。中国の京杭大運河でどんな船がどのように用いられていたのかちょっと探しただけでは見つかっていない。

図V20で遠賀川河口周辺(北九州市)は、現状の認識とかなり異なる

ことを見た。特に、筑紫湖と名付けた湖水の存在は水行の考察に関わると考える。

図 V20 の北九州の部分を少し大きくしたのが次図である。

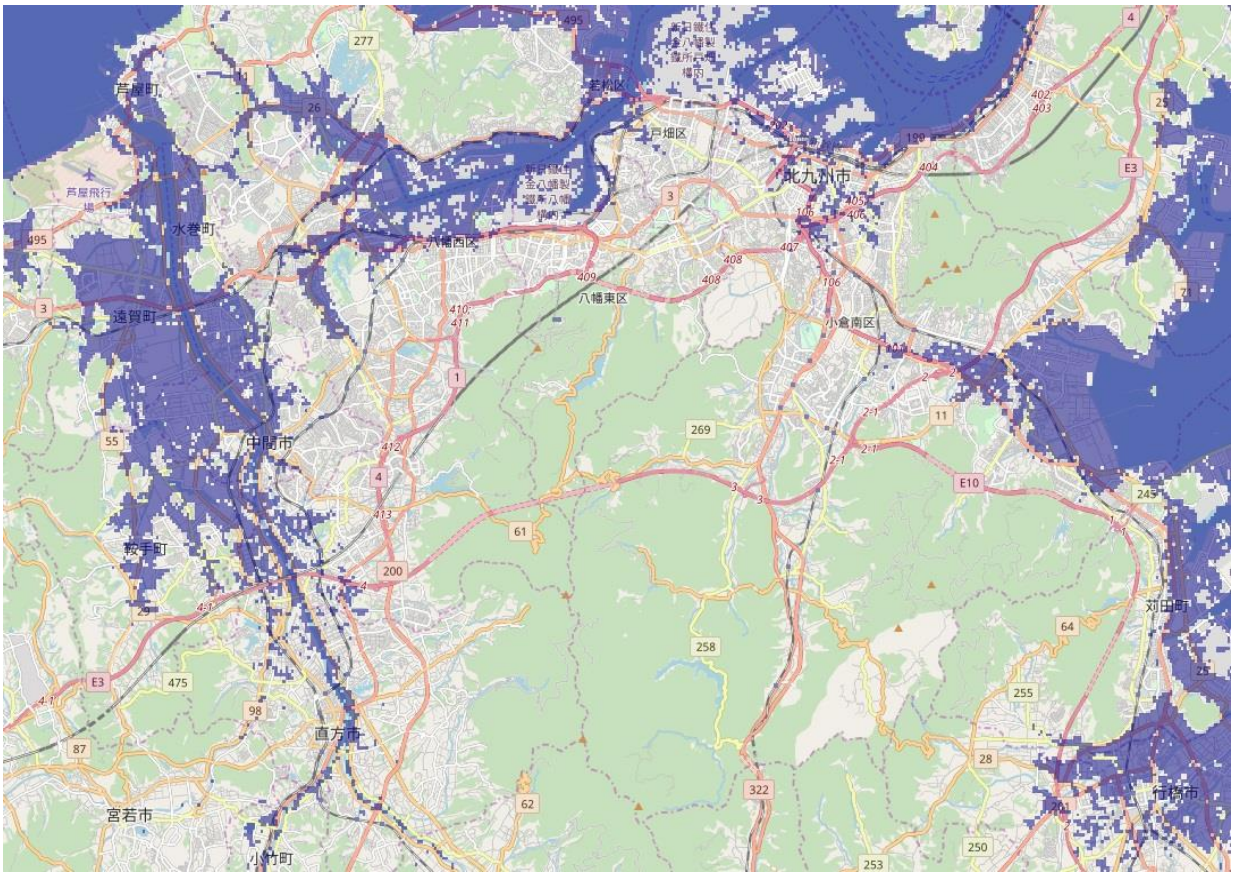

図 V24 Flood Maps 北九州

若松地区が殆ど島であったということがはっきりしてきた。この河口部は穴門の候補と思っている。この図からは、洞海湾から筑紫湖

(遠賀川)に水行と思われる。このような地形としては、糸島・児島・島根半島が挙げられ、千葉県(安房・上総・下総)も加えられるかもしれない。

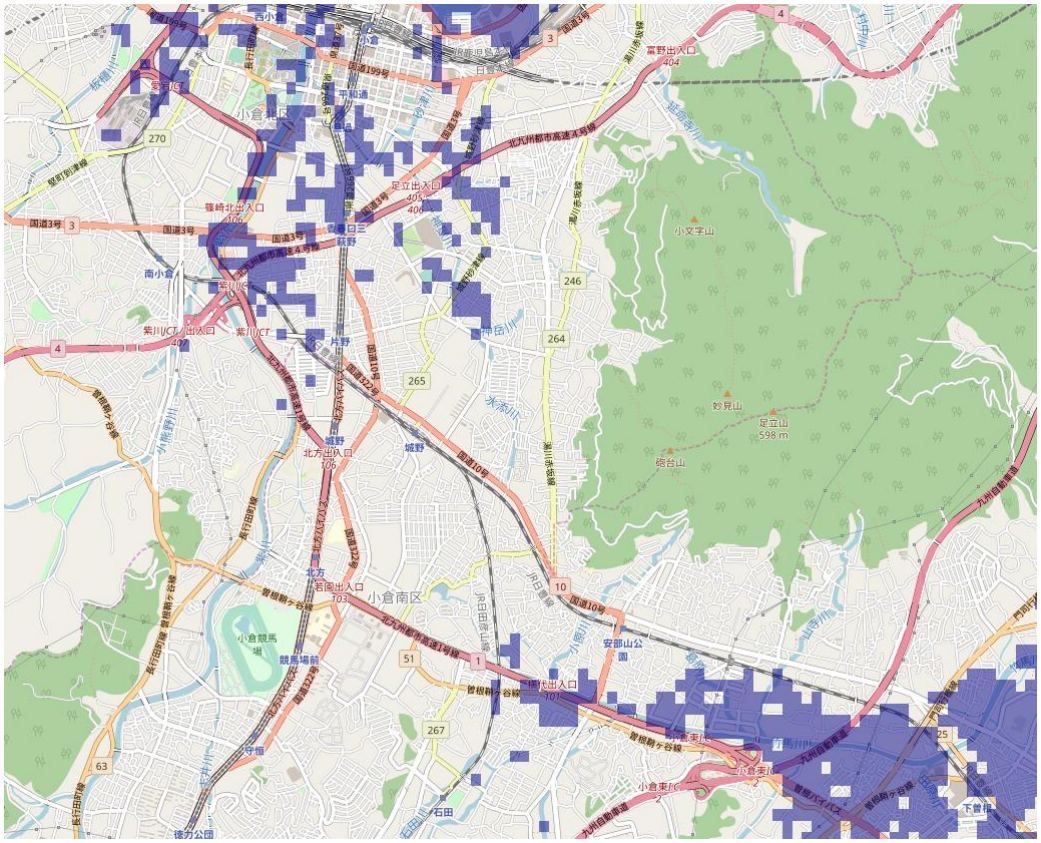

図 V25 Flood Maps 小倉と苅田

若松島の下の半島部の付け根辺りに中馬市がある。ピンインは、投馬: tóu mǎ、中間: zhōng/zhòng jiān/jiàn である。

日豊本線の方も、小倉からは城野駅辺りまで、朽網からは安部山公

園駅辺りまでが、航行できたかもしれない。さらに、現在の川筋を見ていると、残った区間も大半が航行可能であったかもしれない。門司区も島であったことになる。

若松島と中馬市辺りから小倉辺りまでは、船が着くところで、伊都国や奴国の 2.5 倍の五万戸の国としては最適の候補と考えている。水行二十日でどの程度の距離になるかわわからないが、筑紫湖の何処かにあったとしておく。

ここからの水行十日陸行一月で行ける所を考える。不弥国と投馬国の間は水行二十日であったから、その半分である。筑紫湖から遠賀川を遡上するのが丁度これに合うのではないか。直方市辺りが有力と考えているがもう少し南の飯塚市・田川市辺りかもしれない。ここから、陸行一月はうきは市・日田市辺りになるのではないかと考えている。これならば、女王国以北に 21 カ国あり得る。

インテルメディオ　(Part IV・Part V あとがき)

Part IV, V を振り返ってみる。

ここでは、三国志に書かれた以降、すなわち、北九州征服以後の倭について考察した。正史では、晋書に書かれていることになるが。晋書については、Part Ⅰ 3 章で扱ったが、泰始初年 265 から義熙九年 413 の間の 157 年間は朝貢の記事は書かれていない。この意味であろうが、謎の四世紀とよばれている。次の五世紀も謎の世紀と呼ばれている。

日本の正史である日本書紀では、この間も記事が書かれている。

二韓＋倭説からは、北九州征服は神功皇后紀直前に書かれていることになる。これより、崇神天皇紀から神功皇后紀までを眺めた。景行天皇紀には、日本武尊の話が書かれている。熊襲討伐後の日本武尊の遠征は、日本書紀編纂時のフロンティアに場所を移して書かれたのではないかと考えた。また、仲哀天皇紀では、日本武尊第二子也 母皇后曰兩道入姫命 と書かれている。この記事からは、日本武尊は天皇(倭王)であったことになる。これは、皇位(倭王位)をめぐる争いがあったのではないかと思わせる。日本書紀では、皇子で皇位につかず、

不幸な死に方を例がいくつか挙げられる。時系列的には、神武天皇と手研耳命、景行天皇と日本武尊、応神天皇と菟道稚郎子が挙げられる。聖徳太子もこれに加えられるかもしれない。

次に、宋書の五王の記事を考察した。「空企画」における天皇の在位期間と朝貢年とが合う天皇は見つからなかった。最大の疑問は、日本書紀では宋書の五王について何も触れていないのは何故かということである。

ここまでが Part IV である。

Part V では、まず、神武天皇紀を考察した。45 歳で東征を宣言したが、その前の記事は不明文字 4 文字を含む 77 文字で

神日本磐余彦天皇 諱彦火火出見 彦波□武□□草葺不合尊第四子也 母曰玉依姫 海童之小女也 天皇生而明達 意□如也 年十五立爲太子 長而娶日向國吾田邑吾平津媛 爲妃 生手研耳命

が全てである。

初代天皇が即位前に皇太子になるのかとか、45 歳までは何処で何していたのかなどの疑問も生じるが、最大の疑問は神武東征が 6 年間で為されたということ可能であるかということである。

ここで、河内湖と奈良湖の存在や大和川の付け替えを知った。大阪

冬の陣で、真田丸１つで防御になるのは疑問に思っていたが、河内湖の存在で納得がいった。奈良湖の存在は、奈良盆地の経済的価値を低めるはずである。また、斑鳩の地の東と南は奈良湖で、北は生駒山で、河内から奈良盆地への橋頭保としては絶好の位置といえる。

他にも古代の海岸線が描かれているものを探しているうちに、Flood Maps というサイトに出会った。これは、海水面を上下させたときの海岸線をシミュレートできる。河内湖や霞ケ浦の古代推測図と比較した結果、プラス 4m が適当とした。

遠賀川河口部にも河内湖と同様に湖水が現れた。これを筑紫湖と名付けた。女王国への行程表に現れる投馬国をこの筑紫湖の沿岸と考えている。さらに、邪馬台国は遠賀川上流の何処かということになる。河口部の島に根拠地を造り、河を遡って征服するという、神武東征における戦略と同じ方法である。

倭の東征の大筋としてはかなりのところに到達したと思っているが、地名の比定や攻略の時系列的配置などは、考えるたびに細部が変わる状態である。また、悲運の皇子といえる手研耳命・日本武尊、・菟道稚郎子については感想的考察に留まっている。

最後に、この 2 Parts では、作業仮説をあまり設定できなかった。

日本書紀を読みこなせていないことは大きい。例えば、本文と一書曰との差の検討などが挙げられる。この他に、時代が下がることにより、東遷が進み、考慮することが多くなったことも挙げられる。さらには、三国史記との比較も必要となる。これまでは、過去の蓄積もあり、書き進むことができた。今後の進展は遅くなるであろうが、奈良時代、出来れば平安遷都を目指して彷徨する予定である。

付録 神武天皇紀

日本書紀卷第三 神日本磐余彦天皇 神武天皇

神日本磐余彦天皇 諱彦火火出見 彦波□武□□草葺不合尊第四子也 母曰玉依姫 海童之小女也 天皇生而明達 意□如也 年十五立爲太子 長而娶日向國吾田邑吾平津媛 爲妃 生手研耳命

及年四十五歲 謂諸兄及子等曰 昔我天神 高皇産靈尊 大日□尊 擧此豐葦原瑞穗國而授我天祖彦火瓊瓊杵尊 於是火瓊瓊杵尊 闢天關披雲路 駈仙 蹕以戻止 是時運屬鴻荒 時鍾草昧 故蒙以養正治此西偏 皇祖皇考乃神乃聖 積慶重暉多歷年所 自天祖降跡以逮 于今一百七十九萬二千四百七十餘歲 而遼 □之地 猶未霑於王澤 遂使邑有君村有長 各自分彊用相凌□ 抑又聞於鹽土老翁曰 東有美地 青山四周 其中亦有乘天磐船飛降者 余謂 彼地必當足以恢 弘大業光宅天下 蓋六合之中心乎 厥飛降者 謂是饒速日歟 何不就而都之乎 諸皇子對曰 理實灼然 我亦恒以爲念 宜早行之 是年也太歲甲寅

其年冬十月丁巳朔辛酉 天皇親帥諸皇子舟師東征 至速吸之門 時有一漁人 乘艇而至 天皇招之 因問曰 汝誰也 對曰 臣是國神 名曰珍彦 釣魚於 曲浦 聞天神子來 故即奉迎 又問之曰 汝能爲我導耶 對

曰 導之矣 天皇勅授漁人椎 末令執而牽納於皇舟 以爲海導者 乃特賜名爲椎根津彦 （椎 此云 辭毘） 此即倭直部始祖也 行至筑紫國菟狹 （菟狹者地名也 此云宇佐） 時有菟狹國造祖號曰菟狹津彦 菟狹津媛 乃於菟狹川上 造一柱騰宮 而奉饗焉 （一柱騰宮 此云阿斯毘苔徒鞅餓離能瀰椰） 是時 勅以菟狹津媛 賜妻之於侍臣天種子命 天種子命 是中臣氏之遠祖也

十有一月丙戌朔甲午 天皇至筑紫國崗水門

十有二月丙辰朔壬午 至安藝國 居于埃宮

乙卯年春三月甲寅朔己未 徙入吉備國 起行宮以居之 是曰高嶋宮 積三年間 脩舟楫 蓄兵会 將欲以一擧而平天下也

戊午年春二月丁酉朔丁未 皇師遂東 舳艫相接 方到難波之碕 會有奔潮太急 因以名爲浪速國 亦曰浪花 今謂難波訛也 （訛 此云與許奈磨盧）

三月丁卯朔丙子 遡流而上 徑至河内國草香邑青雲白肩之津

夏四月丙申朔甲辰 皇師勒兵歩趣龍田 而其路狹嶮 人不得並行 乃還更欲東踰膽駒山而入中洲 時長髄彦聞之曰 夫天神子等所以來者 必將奪我國 則 盡起屬兵 徼之於孔舍衞坂 與之會戰 有流矢中五瀬命肱脛 皇師不能進戰 天皇憂之 乃運神策於冲衿曰 今我是日神子孫而向日征虜此逆天道也 不若退還 示弱禮祭神祇 背負日神之威 隨影

壓躡 如此則曾不血刃 虜必自敗矣 僉曰 然 於是令軍中曰 且停 勿復進 乃引軍還 虜亦不敢逼 却至草香津 植盾而 爲雄誥焉 （雄誥 此云烏多鷄 麼） 因改號其津曰盾津 今云蓼津訛也 初孔舍衞之戰 有人隱於大樹而得免難 仍指其樹曰 恩如母 時人因號其地曰母木 邑 今云飫悶廼奇訛也

五月丙寅朔癸酉 軍至茅淳山城水門 （亦名山井水門 茅淳 此云智怒） 時五瀨命矢瘡痛甚 乃撫釼而雄誥之曰 （撫劒 此云都盧耆能多伽彌屠利辭魔 屡） 慨哉 大丈夫(慨哉 此云于黎多棄伽夜） 被傷於虜手 將不報而死耶 時人因號其處曰雄水門 進到于紀伊國竈山而五瀨命薨于軍 因葬竈山

六月乙未朔丁巳 軍至名草邑 則誅名草戸畔者 （戸畔 此云妬轂） 遂越狹野而到熊神邑 且登天磐盾 仍引軍漸進 海中卒遇暴風 皇舟漂蕩時稻飯 命乃歎曰 嗟乎 吾祖則天神 母則海神 如何厄我於陸 復厄我於海乎 言訖乃拔釼入海 化爲鋤持神 三毛入野命亦恨之曰 我母及姨並是海神 何爲起波瀾　以漼溺乎 則蹈浪秀而往乎常世鄉矣 天皇獨與皇子手研耳命 帥軍而進至熊野荒坂津 （亦名丹敷浦） 因誅丹敷戸畔者 時神吐毒氣 人物咸瘁 由是皇軍不能 復振 時彼處有人 號曰熊野高倉下 忽夜夢 天照太神謂武甕雷神曰 夫葦原中國猶聞喧擾之響焉 （聞喧擾之響焉 此云左揶霓利奈離） 宜汝更往而征之 武 甕雷神

對曰 雖予不行而下予平國之釼 則國將自平矣 天照太神曰 諾 （諾此云宇每那利） 時武甕雷神登謂高倉下曰 予釼號曰□靈 （□靈 此云赴屠能 瀰□磨） 今當置汝庫裏 宜取而獻之天孫 高倉下曰唯唯而寤之 明旦依夢中教開庫視之 果有落釼 倒立於庫底板 即取以進之 于時 天皇適寐 忽然而寤之 曰 予何長眠若此乎 尋而中毒士卒悉復醒起 既而皇師欲趣中洲 而山中嶮絶 無復可行之路 乃棲遑不知其所跋涉 時夜夢 天照大神訓于天皇曰 朕今遣頭八 咫烏 宜以爲鄉導者 果有頭八咫烏 自空翔降 天皇曰 此烏之來自叶祥夢 大哉赫矣 我皇祖天照大神 欲以助成基業乎 是時 大伴氏之遠祖日臣命帥大來目 督將元戎 蹈山啓行 乃尋烏所向仰視而追之 遂達于菟田下縣 因號其所至之處 曰菟田穿邑 （穿邑 此云于介知能務羅） 于時勅譽日臣命曰 汝忠而且勇　加能有導之功 是以改汝名爲道臣

秋八月甲午朔乙未 天皇使徵兄猾及弟猾者 （猾 此云字介志） 是兩人菟田縣之魁帥者也 （魁帥 此云此登誤廼伽彌） 時兄猾不來 弟猾即詣至 因 拜軍門而告之曰 臣兄兄猾之爲逆状也 聞天孫且到 即起兵將襲 望見皇師之威 懼不敢敵 乃潛伏其兵 權作新宮 而殿内施機 欲因請饗以作難 願知此詐　　善爲之備 天皇即遣道臣命察其逆状 時道臣命審知有賊害之心 而大怒誥嘖之曰 虜爾所造屋 爾自居之 （爾 此云飫例）因案釼彎弓 逼令催入 兄猾獲罪 兄於天 事無所辭 乃自蹈機而

壓死 時陳其屍而斬之 流血沒踝 故號其地曰菟田血原 已而弟猾大設牛酒 以勞饗皇師焉 天皇以其酒完班賜軍卒 乃爲御謠之 曰（謠 此云宇多預瀰） 于 能多伽機珥 辭藝和奈陂蘆 和餓末菟夜 辭藝破佐夜羅孺、伊殊區波辭 區□羅佐夜離 固奈瀰餓 那居波佐麼 多智曾麼能未 廼 那鷄句□ 居氣辭被惠禰 宇破奈利餓 那居波佐磨 伊智佐介幾未迺 於朋鷄句□ 居氣□被惠禰 是謂來目歌 今樂府奏此歌者 猶有手量大小及音聲巨 細 此古之遺式也 是後天皇欲省吉野之地 乃從菟田穿邑 親率輕兵巡幸焉 至吉野時 有人出自井中 光而有尾 天皇問之曰 汝何人 對曰 臣是國神 名爲 井光 此則吉野首部始祖也 更少進亦有尾而披磐石而出者 天皇問之曰 汝何人 對曰 臣是磐排別之子（排別 此云飫時和句 此則吉野國 部始祖也 及 緣水西行 亦有作梁取魚者（梁 此云挪奈）天皇問之 對曰 臣是苞苴擔之子（苞苴擔 此云珥倍毛菟）此則阿太養□部始祖也

九月甲子朔戊辰 天皇陟彼菟田高倉山之巓 瞻望域中 時國見丘上則有八十梟帥（梟帥 此云多稽屡）又於女坂置女軍 男坂置男軍 墨坂置 炭 其 女坂男坂墨坂之號由此而起也 復有兄磯城軍 布滿於磐余邑（磯 此云志 賊虜所據 皆是要害之地 故道路絶塞 無處可通 天皇惡之 ▼是夜自祈而寢　夢 有天神訓之曰 宜取天香山社中土（香山 此云介遇夜摩）以造天平瓮八十枚（平瓮 此云毘邏介）并造嚴瓮 而

敬祭天神地祇（嚴瓮 此云怡途 背）亦爲嚴咒詛 如此則虜自平伏（嚴咒詛 此云怡途能伽辭離）天皇祇承夢訓 依以將行 時弟猾又奏曰 倭國磯城邑有磯城八十梟帥 又高尾張邑（或本 云 葛城邑也）有赤銅八十梟帥 此類皆欲與天皇距戰 臣竊爲天皇憂之 宜今當取天香山埴以造天平瓮 而祭天社國社之神 然後擊虜則易除也 天皇既以夢辭爲吉兆 及聞弟猾之言 益喜於懷 乃使椎根津彦著弊衣服及蓑笠 爲老父貌 又使弟猾被箕 爲老嫗貌 而勅之曰 宜汝二人到天香山 潛取其巓土而可來旋矣　基業成否 當以汝爲占 努力愼歟 是時虜兵滿路 難以往還 時椎根津彦乃祈之曰 我皇當能定此國者 行路自通 如不能者賊必防禦 言訖徑去 時羣虜見二 人 大咲之曰 大醜乎（大醜 此云鞅奈瀰爾勾）老父老嫗 則相與闢道使行 二人得至其山 取土來歸 於是天皇甚悅 乃以此埴造作八十平瓮 天手抉八十枚（手抉 此云多衢餌離）嚴瓮、而陟于丹生川上 用祭天神地祇 則於彼菟田川之朝原 譬如水沫而有所咒著也 天皇又因祈之曰 吾今當以八十平 無水造 飴 飴成則吾必不假鋒刃之威 坐平天下 乃造飴 飴即自成 又祈之曰 吾今當以嚴瓮沈于丹生之川 如魚無大小悉醉而流 譬猶□葉之淨流者（□此云磨 紀）吾必能定此國 如其不爾 終無所成 乃沈於川 其口向下頃之魚皆浮出 隨水□□ 時椎根津彦見而奏之 天皇大喜 乃拔取丹生川上之五百箇眞坂樹以 祭諸神 自此始有嚴 之置也 時勅道臣命 今

以高皇産靈尊 朕親作顯齋 （顯齋 此云于圖詩怡破毘） 用汝爲齋主 授以嚴媛之號 而名其所置埴瓮爲嚴瓮　 又火名爲嚴香來雷 水名爲嚴罔象女（罔象女 此云瀰蒐破廼迷）粮名爲嚴稻魂女（稻魂女 此云于伽能迷）薪名爲嚴山雷 草名爲嚴野椎

冬十月癸巳朔 天皇嘗其嚴瓮之粮 勒兵而出 先擊八十梟帥於國見丘破斬之 是役也 天皇志存必克 乃爲御謠之曰 伽牟伽筮能 伊齊能于瀰能 於費異 之珥夜 異波臂茂等倍屡 之多 瀰能 之多 瀰能 阿誤豫之多太瀰能 異波比茂等倍離 于智弖之夜莽務 于智弖之夜莽務 謠意以大石喩其國見丘也 既 而餘黨猶繁 其情難測 乃顧勅道臣命 汝宜帥大來目部 作大室於忍坂邑 盛設宴饗 誘虜而取之 道臣命於是奉密旨 掘 於忍坂 而選我猛卒 與虜雜居 陰 期之曰 酒酣之後 吾則起歌 汝等聞吾歌聲 則一時刺虜 已而坐定酒行 虜不知我之有陰謀 任情徑醉 時道臣命乃起而歌之曰 於佐箇廼於朋務露夜珥 比苔 瑳破而 異離烏利苔毛 比苔瑳破而 枳伊離烏利苔毛 瀰都瀰都志 倶梅能固邏餓勾鷲都都伊 異志都都伊毛智 于智弖之夜莽務 時我卒聞歌 倶拔其頭椎 釼 一時殺虜 虜無復□類者 皇軍大悦 仰天而咲 因歌之曰 伊莽波豫 伊莽波豫 阿阿時夜□ 伊莽□而毛阿誤豫 伊莽□而毛阿誤豫 今來目部歌而後大 哂 是其縁也 又歌之曰 愛瀰詩烏毘 利 毛毛那比苔 比苔破易陪廼毛 多牟伽毘毛勢儒 此皆承密旨而歌之 非敢自專者

也 時天皇曰 戰勝而無驕者 良將 之行也 今魁賊已滅 而同惡者匈匈十數羣 其情不可知 如何久居一處無以制變 乃徙營於別處

十有一月癸亥朔己巳 皇師大擧 將攻磯城彦 先遣使者徵兄磯城 兄磯城不承命 更遣頭八咫烏召之 時烏到其營而鳴之曰 天神子召汝 怡奘過 怡奘 過（過 音倭）兄磯城忿之曰 聞天壓神至 而吾爲慨憤時 奈何烏鳥若此惡鳴耶 （壓 此云飫葛）乃彎弓射之 烏即避去 次到弟磯城宅而鳴之曰 天神 子召汝 怡奘過 怡奘過 時弟磯城 然改容曰 臣聞天壓神至 旦夕畏懼 善乎烏 汝鳴之若此者歟 即作葉盤八枚 盛食饗之（葉盤 此云毘羅耐）因以隨 烏 詣到而告之曰 吾兄兄磯城聞天神子來 則聚八十梟帥 具兵甲將與決戰 可早圖之 天皇乃會諸將 問之曰 今兄磯城果有逆賊之意 召亦不來 爲之奈何　諸將曰 兄磯城黠賊也 宜先遣弟磯城曉喩之 并説兄倉下 弟倉下 如遂不歸順 然後擧兵臨之亦未晩也 （倉下 此云衢羅餌）乃使弟磯城開示利害 而兄磯城等猶守愚謀不肯承伏 時椎根津彦計之曰 今者宜先遣我女軍 出自忍坂道 虜見之 必盡鋭而赴 吾則駈馳勁卒、直指墨坂 取菟田川水以潅其炭火 □忽之間 出其不意 則破之必也 天皇善其策 乃出女軍以臨之 虜謂大兵已至 畢力相待 先是皇軍攻必取 戰必勝 而介冑之士不無疲弊 故聊爲御謠以慰將卒之心 焉 謠曰 □□奈梅弖 伊那瑳能椰摩能 虚能莽由毛 易喩耆摩毛羅毘 多多介陪□ 和例破椰隈怒 之

摩途等利 宇介譬餓等茂 伊莽輸開珥虚禰 果以男軍越 墨坂 從後夾擊破之斬其梟帥兄磯城等

十有二月癸巳朔丙申 皇師遂擊長髄彦 連戰不能取勝 時忽然天陰而雨氷 乃有金色靈鵄 飛來止于皇弓之弭 其鵄光曄□ 状如流電 由是長髄彦軍卒皆 迷眩不復力戰 長髄是邑之本號焉 因亦以爲人名 及皇軍之得鵄瑞也 時人仍號鵄邑 今云鳥見 是訛也 昔孔舍衞之戰 五瀬命中矢而薨 天皇□之 常懷憤　至此役也 意欲窮誅 乃爲御謠之曰 瀰都瀰都志 倶梅能故邏餓 介耆茂等珥 阿波赴珥破 介瀰羅毘苔茂苔曾迺餓毛苔 曾禰梅屠那藝弖 于笞弖之夜莽務　又謠之曰 瀰都瀰都志 倶梅能故邏餓 介耆茂等珥 宇惠志破餌介瀰 勾致弭比倶 和例破□輸例儒于智弖之夜莽務 因復縱兵忽攻之 凡諸御謠 皆謂來目歌此的取歌者而名之也 時長髄彦乃遣行人言於天皇曰 嘗有天神之子乘天磐船自天降止 號曰櫛玉饒速日命（饒速日 此云爾藝波揶卑）是娶吾妹三炊屋媛（亦名長髄媛 亦名鳥見屋媛）遂有兒息 名曰可美眞手命（可美眞手 此云于魔詩莽耐）故吾以饒速日命爲君而奉焉 夫天神之子豈有兩種乎 奈何更穩天 神子 以奪人地乎 吾心推之、未必爲信 天皇曰 天神子亦多耳 汝所爲君 是實天神之子者 必有表物 可相示之 長髄彦即取饒速日命之天羽羽矢一隻及歩靭 以奉示天皇 天皇覧之曰 事不虚也 還以所御天羽羽矢一隻及歩靭 賜示於長髄彦 長髄

彦見其天表 益懷□□ 然而凶器已搆 其勢不得中休 而猶守迷圖 無復改意 饒速日命本知天神慇懃唯天孫是與 且見夫長髓彦禀性愎 不可教以天人之際 乃殺之 帥其衆而歸順焉 天皇素聞饒速日命是自天降者 而今果立忠効 則褒而寵之 此物部氏之遠祖也

己未年春二月壬辰朔辛亥 命諸將練士卒 是時層富縣波□丘岬有新城戸畔者 （丘岬 此云 □介佐棄） 又和珥坂下有居勢祝者 （坂下 此云瑳伽梅 苔） 臍見長柄丘岬有猪祝者 此三處土蜘蛛並恃其勇力不肯來庭 天皇乃分遣偏師皆誅之 又高尾張邑有土蜘蛛 其爲人也身短而手足長 與侏儒相類 皇軍結葛 網而掩襲殺之 因改號其邑曰葛城 夫磐余之地舊名片居 （片居 此云伽□韋） 亦曰片立 （片立 此云伽□□知） 逮我皇師之破虜也 大軍集而滿於其地 因改號爲磐余 或曰 天皇徃嘗嚴瓮粮出軍而征 是時 磯城八十梟帥於彼處屯聚居之 （屯聚居此云怡波瀰萎） 果與天皇大戰 遂爲皇師所滅 故名之曰磐余 邑 又皇師立詰之處 是謂猛田 作城處號曰城田 又賊衆戰死而僵屍枕臂處呼爲頬枕田 天皇以前年秋九月 潛取天香山之埴土 以造八十平瓮 躬自齋戒祭諸 神 遂得安定區宇 故號取土之處曰埴安

三月辛酉朔丁卯 （七） 下令曰 自我東征於茲六年矣 頼以皇天之威凶徒就戮 雖邊土未清 餘妖尚梗 而中洲之地無復風塵 誠宜恢廓皇都規大壯 而 今運屬此屯蒙 民心朴素 巣棲穴住 習俗惟常 夫大人立制

義必隨時 苟有利民 何妨聖造 且當披拂山林 經營宮室 而恭臨寶位以鎮元元 上則答乾靈授 國之德 下則弘皇孫養正之心 然後兼六合以開都 掩八紘而爲宇不亦可乎 觀夫畝傍山 （畝傍山 此云宇禰縻夜摩）東南橿原地者 蓋國之墺區乎 可治之

是月 即命有司經始帝宅

庚申年秋八月癸丑朔戊辰 天皇當立正妃 改廣求華胄 時有人奏之曰事代主神共三嶋溝口耳神之女玉櫛媛 所生兒 號曰媛蹈口五十鈴媛命是國色之秀者 天皇悅之

九月壬午朔乙巳 納媛蹈口五十鈴媛命 以爲正妃

辛酉年春正月庚辰朔 天皇即帝位於橿原宮 是歲爲天皇元年尊正妃爲皇后 生皇子神八井命 神渟名川耳尊 』故古語稱之曰 於畝傍之橿原也 太 立宮柱於底磐之根 峻峙搏風於高天之原 而始馭天下之天皇號曰神日本磐余彦火火出見天皇焉 初天皇草創天基之日也 大伴氏之遠祖道臣命帥大來目部奉承 密策 能以諷歌倒語掃蕩妖氣 倒語之用始起乎茲

二年春二月甲辰朔乙巳 天皇定功行賞 賜道臣命宅地居于築坂邑 以寵異之 亦使大來目居于畝傍山以西川邊之地 今號來目邑 此其緣也以珍彦爲倭國 造 （珍彦 此云于口毘故 ）又給弟猾猛田邑 因爲猛田縣主 是菟田主水部遠祖也 弟磯城名黒速 爲磯城縣主 復以釼根者爲

葛城國造 又頭八咫烏亦人賞 例 其苗裔即葛野主殿縣主部是也

四年春二月壬戌朔甲申 詔曰 我皇祖之靈也自天降鑒光助朕躬 今諸虜已平 海内無事 可以郊祀天神用申大孝者也 乃立靈畤於鳥見山中 其地號曰上小野榛原 下小野榛原 用祭皇祖天神焉

卅有一年夏四月乙酉朔 皇與巡幸 因登腋上□間丘 而廻望國状曰 妍哉乎國之獲矣 （妍哉 此云鞅奈珥夜） 雖内木錦之眞□國 猶如蜻蛉之臀□焉 由是始有秋津洲之號也 昔伊弉諾尊目此國曰 日本者浦安國細戈千足國 磯輪上秀眞國 （秀眞國 此云袍圖莽勾爾） 復大己貴大神目之曰 玉牆内國 及至 饒速日命乘天磐船 而翔行太虚也 睨是郷而降之 故因目之曰虚空見日本國矣

卅有二年春正月壬子朔甲寅 立皇子神渟名川耳尊爲皇太子

七十有六年春三月甲午朔甲辰 天皇崩于橿原宮 時年一百廿七歳 明年秋九月乙卯朔丙寅 葬畝傍山東北陵

Part V 目次

序

11.　神武東征　　神武天皇紀　3

序

11.1.　　東征以前　5

11.2.　　東征開始　10

11.3.　　近畿転戦　15

11.4.　　神武東征検討　24

12.　古代の海岸線　（縄文海進）　47

序

12.1.　　海進　51

12.2.　　Flood Maps　55

12.3.　　旅程再考　77

インテルメディオ　（Part IV・Part V あとがき）　84

付録　　神武天皇紀　88